伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇一四年　第七十三号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS
No.73 2014

表紙解説

伊能大図（彩色復元図二〇二号）長崎の部分

（アメリカ議会図書館蔵）

平戸の松浦史料博物館に華麗な長崎部分の伊能大図が伝存されていることを思い出し、紹介したいと考えたが、私のデータベースから探し出せなかった。

締め切りが迫っているので、アメリカ議会図書館の大図の彩色復元図から長崎部分を切り出して掲載する。

まず、驚くのは、長崎の町内を大変細かく、縦横に、測線が走っていることである。伊能隊は、第八次測量で、屋久島、種子島を測ったあと、北上して九州の北部海岸、壱岐、対馬、五島列島などを測り、文化一〇年（一八一三）八月一八日に長崎に到着した。このあと、九月三日に出発するまで一四泊して市内を測量し、九夜、天体観測をおこなった。

当時の長崎は外国への窓口として重要都市ではあったが、測線密度は想像以上に濃密である。測量の詳細は、会報四四号（二〇〇六）で松尾紀成（まつお・よしのり）氏が紹介しているし、イノペディア同人の入江正利氏のホーム頁にも詳しい。

八月一八日は四つ半に、稲佐から乗船して長崎に到着。遠山の金さんの父遠山左衛門尉が奉行を務める長崎奉行所に出頭、用人福田仁右衛門に届を提出。他は挨拶のみで休養。

一九日には大村藩の老侯から使者があり、国産品をいただく。測量は一九日から始まったが、長崎は見所が多く、好奇心旺盛な忠敬は、全部見てやろうという気持ちから、敢えて細かく測線を走らせたと推測する。

これまで苦労を共にしてきたしてきた隊員にも、長崎見物をさせてやろうという思いがあったかも知れない。

二九日には、地図並びに諸帖調べ逗留、とあるが、これは多分、休日である。フリータイムを与えられた隊員はそれぞれに休暇を楽しんだのではないか。

測量日記をみると、だいたい逗留は一〇日に一日くらいで、ほとんど大きな町である。山の中の逗留はまず無い。長崎は特に大型の息抜きだったろう。乙名の末次忠助が出るとあるが、これは忠敬をどこかに、案内あるいは接待であったろう。

九月一日の項には出島を見学し象を見たとあるが、このとき、オランダ船が入港していた。唐船も見学したという。

渡辺　一郎

（表紙題字は忠敬の筆跡）

目次　73号

グラビア

●伊能図の旅　星埜　由尚

九州沿海図第17の部分（東京国立博物館蔵）

九州沿海図第8・11の部分（東京国立博物館蔵）

平戸領全図（松浦史料博物館蔵）　1

話題

●伊能忠敬の書簡二通　加藤　時男　6

●連載　高橋（景保）御用日記より（四）　渡辺　一郎　11

●高宮家家伝薬に纏わる逸話　高宮　啓明・高宮　宏・高宮　勲・渡辺　一郎　17

忠敬談話室

●伊能忠敬が行かなかった日本　小笠原諸島はなぜ列強に侵略されなかったのか　鈴川　準二　22

●伊能測量漫筆　四　桑原隆朝は伊能測量の影のキーマン　渡辺　一郎　24

●伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて　―各地の記念碑・標柱等紹介（二）―　河崎　倫代　25

●山武歳時記（六）　―夏場が旬の「九十九里地はまぐり」―　江口　俊子　29

●マルタ島見聞記　I・W生　31

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第八回　伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版　監修　渡辺　一郎　編著　井上　辰男　34

ニュース・お知らせ

・石川県支部ニュース　加賀藩測量の足跡をたどる（一）　室山　孝　47

・笹山領測量二〇〇年記念　伊能忠敬ミニフロア展　伊能　楯雄

・香取支部ニュース

・ほか（事務局）

伊能図の旅

人吉

九州沿海図第17の部分（東京国立博物館蔵）

今回は、九州沿海図と平戸侯に進呈した平戸領全図を取り上げることとしたい。九州沿海図は、第七次（九州第一次）測量終了後に伊能測量隊により描かれ、幕府に提出された。明治初期に浅草文庫に収納され、その後現在の東京国立博物館に引き継がれ所蔵されてきた。大、中、小の図がそろっており、大図は、第七次測量の九州部分を二十一図葉で覆う。重要文化財に指定されている。全体の色調はやや暗いが、極めて表現豊かな図で、平地が桃色がかっており、最終成果の一つ前の段階で描かれ、最終成果の表現様式などを知る上で極めて重要な位置づけを持っている。

人吉測線重ね図（東京カートグラフィック猪原紘太氏作成）

人吉

伊能測量隊は、人吉を三回訪ねている。その都度、人吉城主相良侯は使者を出し、贈り物があった。図を見ると、球磨川に沿って測線が続いており、人吉城下では、城下の端まで測線を延ばしている。第七次測量において、文化七年九月に坂部隊が加久藤から人吉を通過して球磨川に沿って測量し八代まで達している。人吉では藩主相良侯より贈り物があった。この前日にも、大畑村にて藩の役人から藩主の贈り物を貰っている。十一月には、忠敬の本隊が佐敷から横切り測量を行い、球磨川の測線につないだ後、人吉城下を訪れ、藩侯の使者の挨拶を受け、贈り物を貰っている。その後、球磨川を船で下り、八代へ向かった。忠敬は、佐敷からの横切測量は兎も角、わざわざ藩侯の挨拶を受けるため人吉城下に向かったのである。

第八次測量では、文化九年六月に坂部隊が第七次測量と同じ行程で加久藤から人吉に無測量で向かい、人吉城下の客館に宿泊した。この時も相良侯から贈り物が出ている。翌日、人吉を出立し、米良街道を測量し、相当な難所を山越えして佐土原に向かっている。

このように、伊能測量隊は、再三人吉城下を訪れ、その都度藩侯から贈り物があった。忠敬は、横切り測量のためとはいえ、わざわざ球磨川を遡り人吉城下を訪ね、藩侯の使者の挨拶を受けている。米良街道測量も、米良荘の土豪で交代寄合の扱いを受けていた米良家の在所を通過し、地図にも米良主膳在所と記している。

人吉藩は、二万二千石の外様小藩であったが、肥後藩、薩摩藩といった外様大藩に囲まれていた。戦国時代には、薩摩に臣従していたが、豊臣秀吉の島津征伐に乗じて独立した。徳川政権下では、その初期に藩の宿老が謀反を起こして鎮圧している。このときは、何故か処分を受けず、相良家は明治まで財政難に喘ぎながら命運を保つことができた。江戸からは大変な遠隔の地であり、その南には得体の知れない薩摩藩が控えている。伊能測量隊が人吉を再三訪れ、忠敬がわざわざ城下を訪れたことにも意味があったのであろう。

（星埜）

牛の峠

九州沿海図第8・11の部分
（東京国立博物館蔵）

牛の峠測線地形図重ね図（東京カートグラフィック猪原紘太氏作成）

牛の峠測線重ね図（東京カートグラフィック猪原紘太氏作成）

九州沿海図第８･11の部分（東京国立博物館蔵）

牛の峠

日向の南、鰐塚山地の牛の峠を飫肥と都城とを結ぶ街道が越えている。伊能測量隊は、第七次測量で飫肥から牛の峠までと都城から牛の峠までとの二回に分けてこの街道を測量し、牛の峠で測線をつないでいる。現在は、国道二二二号線が日南市と都城市を結んでいるが、牛の峠を通らずに南に迂回している。国土地理院の地形図には、牛の峠を徒歩道が越えており、かつての街道の名残であろう。地形図には、牛の峠に向かって直線上に分岐する国道二二二号も描示されており、南に迂回する国道は、曲折の著しい道路であるところから、今後牛の峠の直下にトンネルが掘られ、都城・日南間の道程を短縮するのかもしれない。そうすれば、元の街道に戻ることとなる。

牛の峠の道は、険路であったようで、大図に描かれた測線は、細かく屈曲している。これは、傾斜の急な山道のため、短い距離しか見通せず測点が多くなってしまったためである。山間での測量の苦労が思いやられる大図である。

文化七年四月二十八日坂部支隊は、飫肥城下を出立し、牛の峠に向かった。日記には大隅街道と記載されている。途中酒谷村本村、酒谷村白木俣に止宿し、牛の峠の飫肥・薩摩の領界まで測量した。領界には境界杭があり、そこに印を残して引き返した。休憩のための小屋があったようで、そこで昼食を摂り、鹿児島側には、薩摩藩役人の出迎えがあり、茶と菓子のごちそうを受け小休止をとったと日記には記されている。その後飫肥城下へ引き返した。

坂部支隊は、その後大隅半島を周り、六月十九日には宮丸村（都城）から牛の峠まで測量した。一日で牛の峠まで測り、四月に残してあった杭の印につないだ。これにて横切測量が終わると日記には記している。

牛の峠は、十七世紀に飫肥藩と薩摩藩の間に木材資源を巡る境界争いのあったところで、幕府に提訴され一六七五年まで決着がつかなかった。伊能測量の時には、論所の決着後既に百年以上経っていたので、測量の実施に影響はなかったようである。

（星埜）

平戸領全図（松浦史料博物館蔵）

平戸

平戸領全図
（松浦史料博物館蔵）

平戸

平戸には、著書『甲子夜話』が有名な江戸時代後期の名君、松浦静山の所望した伊能図がある。平戸藩領の部分を描いた大図の副本で、平戸市の松浦史料博物館の所蔵である。平戸侯に献呈された地図だけあって丁寧に描かれた美麗な図である。文化十年一月二十九日に平戸城下に着いた伊能測量隊は、二月十六日まで平戸島の測量に従事した。

平戸では城下の測量のほか、白嶽、安満嶽（やすまんだけ）の山頂まで測量している。測量日記には、城下の測量の経路を詳しく記し、オランダ屋敷の跡、松浦家重臣の屋敷などの記述があるが、大図には記載されていない。また、川内浦には歌舞伎の国姓爺合戦で有名な鄭成功の屋敷跡があると日記に記しているが、これも大図に表示されているわけではない。白嶽は、標高二百五十米の低い山であるが、頂上には白嶽神社がある。白嶽への測量を平戸侯が見学したと測量日記には記載されている。蜂須賀侯が大阪で測量機器を見たそうだが、大名が伊能測量を視察した唯一の例であろう。日記にはあっさりと書かれているが、その対応には苦労があったのではなかろうか。

平戸島では、城下測量ののち隊を二つに分け、忠敬率いる本隊は、安満嶽に登っている。安満嶽は標高五百十四米の平戸島最高峰であり、白山大権現を祀っている。中図には安満嶽から方位線が五島などに引かれており、交会法の測量を行うためには最適の地であった。白山神社は、社領が三十五石余で、別当寺である西禅寺も寺領二百石であった。大図には、これらの神社や寺院の甍が描かれている。

平戸は隠れキリシタンの島である。安満嶽の石塔は、安満岳の奥の院として隠れキリシタンによって密かに信仰されたといわれ、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産「平戸島の聖地と集落」の一部として暫定リストに掲載されている。

（星埜）

伊能忠敬の書簡二通

加藤時男

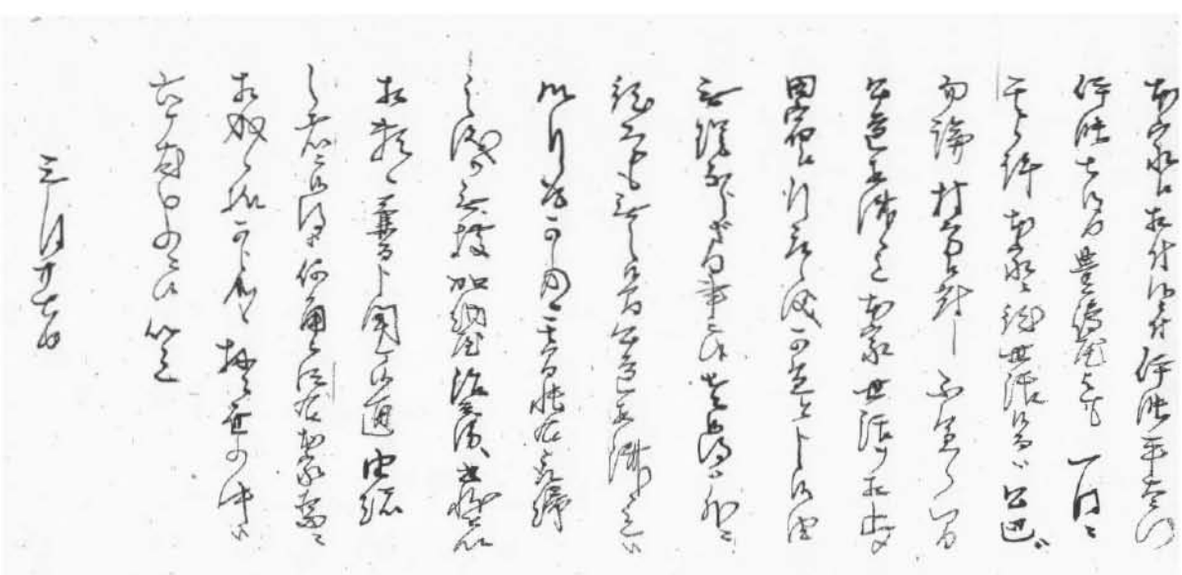
(一) 横芝光町神保家に伝来した伊能忠敬の書簡

千葉県山武郡横芝光町小堤の神保家は伊能忠敬の父神保貞恒の生家としてよく知られている。筆者も昭和五〇年代に神保家を訪問し、神保家文書を拝見した。その折に従来知られていなかった俳諧資料を調査し、神保幸宗夜松（忠敬従弟）、貞恒都船（忠敬父）ら忠敬周辺の人々が白井鳥酔（長生郡長南町出身）門下の俳人であることを発見した。そのことは本紙『伊能忠敬研究』第二二号（平成十二年）に、「伊能忠敬周辺の人々―千葉県山武郡横芝町　神保家資料等から―」として紹介した。

この調査のときには、神保家宛の忠敬書簡は発見されなかったが、明治期の伊能家当主伊能源六から神保家当主神保貢宛の書簡や、神保家宛でない伊能忠敬書簡を目にした。

神保家文書は、その後平成元年に現当主神保誠氏により千葉県文書館に寄託され、平成十二年には千葉県文書館発行の『収蔵文書目録第十三集諸家文書目録5』に「横芝町小堤　神保家文書目録」として公開されている。今回改めて千葉県文書館を訪れ、前記伊能忠敬と伊能源六の書簡を調査し、ここに紹介するものである。

(1) 伊能忠敬書簡　神保家文書 77-2



御状致披見候、弥御清安
珍重不少候、此方無異御安意
可給候、然ハ永沢太兵衛金段
御掛合之旨被仰遣致承知候
一不作不納之儀三百俵も有之候所
大ニ減し候而九十俵計ニ相成候旨
致大慶候、扨不作世話人追々
御相談可被成旨致承知候、世話料
之儀一人何表と不被成小作米高ニ
応し御究メ可被成候
一新地頼母子一件為新地代
大和屋三郎兵衛
地頭所ニ相頼四月廿日限之御差紙
本家江相付候ニ付伊能平右衛門
伊能七左衛門豊嶋屋迄も一同ニ
其御許本家ニ致世話候而ハ公辺ハ
勿論村方江対し不宜候間
公辺相済候迄本家世話ヲ相止メ
田宿江引取候儀可宜と申候由
無理ならざる事ニ候、さ候得ハ外ニ
致方も無之候間公辺相済候迄ハ
御引取可被成候、其間帳合取締
之儀ハ無拠加納屋治兵衛へ書状を以
相頼候、兼而申聞ケ候通由緒
之者ニ候得ハ何角被仰合本家為ニ
相成候様可被成候、扨々世の中ハ
六ヶ敷もの二候、以上
三月廿七日
伊能正作殿　　伊能勘解由
御復

この書簡の書体は、まぎれもない忠敬の書簡であるが、宛名は神保家ではなく伊能一族の正作宛となっている。この書簡が神保家に伝来した理由は、次に紹介する二通の伊能源六書簡と併せて推測するに、明治期になって忠敬の増位を記念して、伊能家から神保家に進呈されたものではなかろうか。

内容的には、入婿後の凶作続きのなかで、伊能家の家政回復に努力する忠敬の苦労がうかがわれるが、勘解由とあるので、寛政六年隠居後の書簡であることがわかる。しかし、具体的状況は筆者には解らない。ただ、最後の一節「扨々世の中ハ六ヶ敷もの二候」というくだりに、忠敬の思いがしのばれる。

(2)伊能源六書簡　神保家文書 オ27

（封筒）
「上総小堤村　下総佐原
神保　貢様　伊能源六
親展
三月十四日」

尚々時下折角御厭ひ専一奉存候
且麁菓壱折呈上候間御笑留可被下候
一筆啓上仕候、未夕寒冷
不退候得共先以
御家内様御揃愈御安康
之段奉恐賀候、隨者拙家一同
無異儀乍憚御休意思召
可被下候、然者於テ
御政府ニ私祖々父忠敬ニ
先年之功蹟ヲ　御賞シ
被下置贈位　御宣下之
趣、今般其御筋　ゟ御達し
相成誠ニ難有儀ニ候、恐悦
仕候、尊家様へ御産候御仁ニ候、
御家之誉ニも相成御同様ニ
御祝可被下候、則御達し
写弐葉差上候間御先代様
方之御霊前江御備へ可被下候、
乍末御家内皆々様へ宜敷
御鳳声願上候、先者不取敢
御報知迄如此御座候、草々以上
三月十四日
伊能源六
神保　貢様
尊上

(3)伊能源六書簡　神保家文書 オ26

（封筒）
「（上）総武射郡小堤村　下総佐原
神保　貢様　伊能源六
平安御用
五月五日投函」

尚々御家内様宜敷御鳳声願上候
一筆啓上仕候、追而暖和
ニ相成候へ共先以　御家内様
御揃愈御安康之段奉恐賀

候、隨者小生一統無異儀乍憚
御休意思召被下度候、然者
兼々御通知申上候贈位被賜
候付聊祝意を表スル為本月
十三日麁酒呈上仕度候間、御閲
も無之候ハヽ十二日迄ニ御来車被
下度奉待上候、御遠方態々
御招申上候而も何の風情無之
甚夕御麁末之義ニハ可有之候へ共
御操合御光来之程願上其
余者得御意可申上候
早々不備
五月五日
伊能源六
神保貢様
貴下

この二通の書簡は、明治十六年の伊能忠敬正四位増位に関する書簡である。伊能源六は、神保家と縁戚の横芝町屋形の海保家から、幕末安政四年に佐原の伊能家に入婿し、伊能家を再興した人物である。そのあたりの事情は、本誌第六五号に掲載された海保英之氏の「伊能三郎右衛門家を再興した伊能源六景文と海保家について」に詳しい。

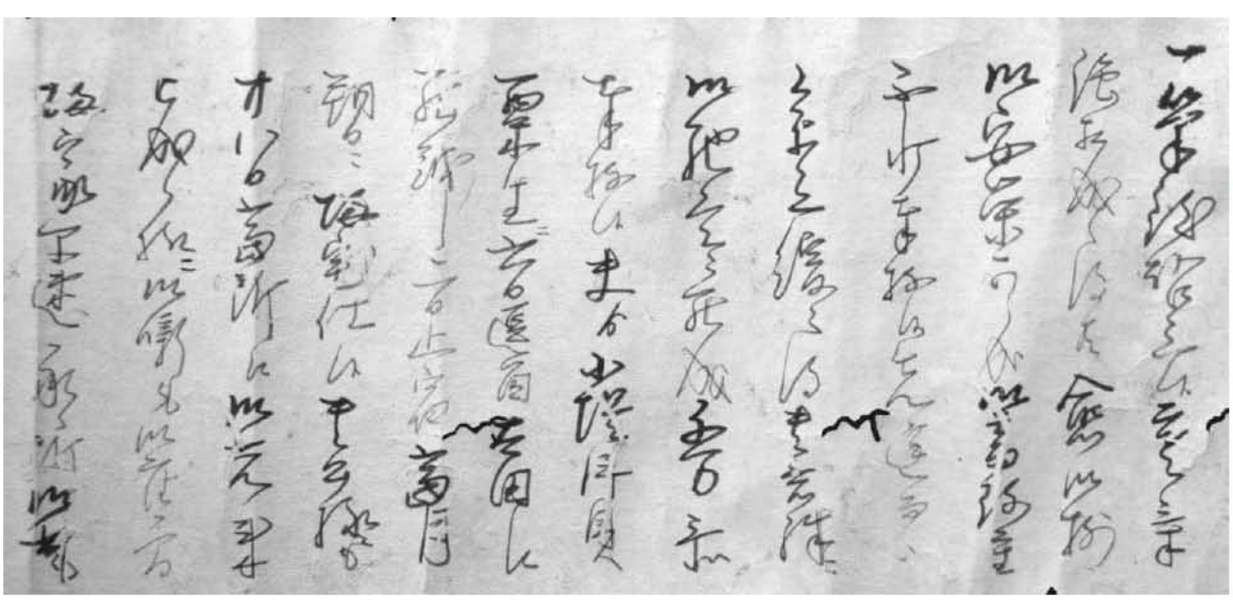
(二) 多古町五十嵐家に伝来した伊能忠敬書簡

昨年(平成二十五年)八月、千葉県香取郡多古町の米本允信家(米本図書館)から発見された幕末、明治期の儒者並木栗水宛の書簡一四〇人、二三〇通余を調査する機会があった。栗水は尊王派志士大橋訥庵の高弟であり、訥庵が文久二年の坂下門外の変に連座し獄死する直前に佐原に帰り、次いで多古で私塾螟蛉塾を経営し、北総の人々に大きな影響を与え、多くの門人を育成した。

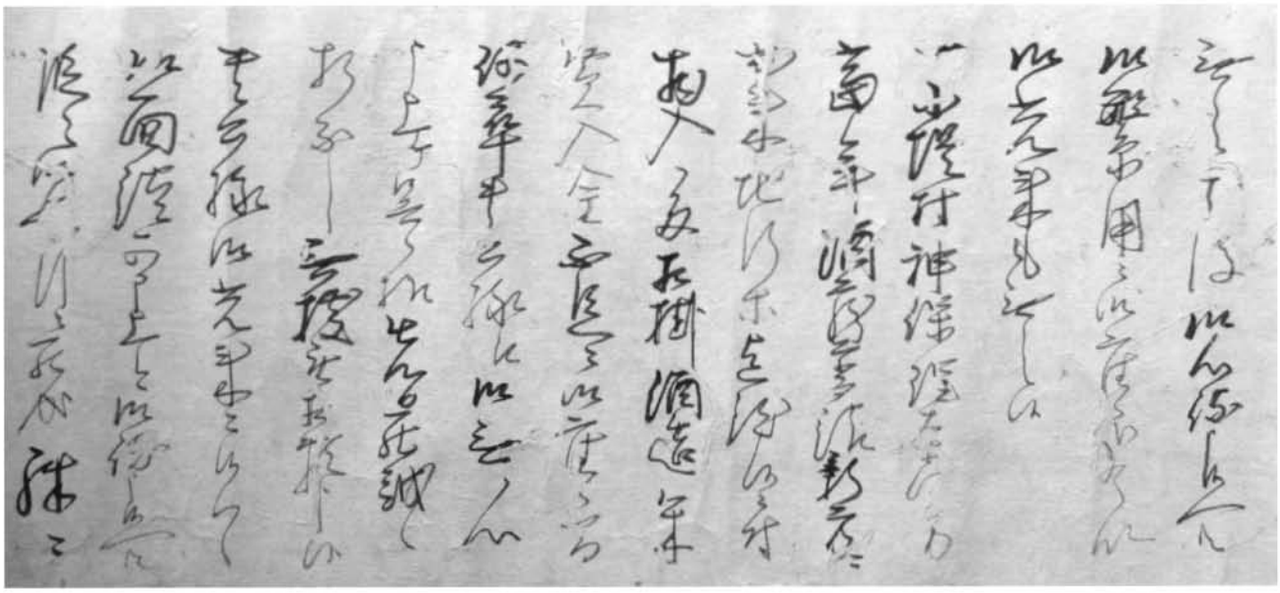
今回調査した書簡の中には多古町の門人も多く、その一人に平山勘兵衛もいた。周知の通り伊能忠敬は南中村(多古町)の平山藤右衛門の養子となり、佐原の伊能家に婿入りしている。平山勘兵衛も平山一族の一人であろう。

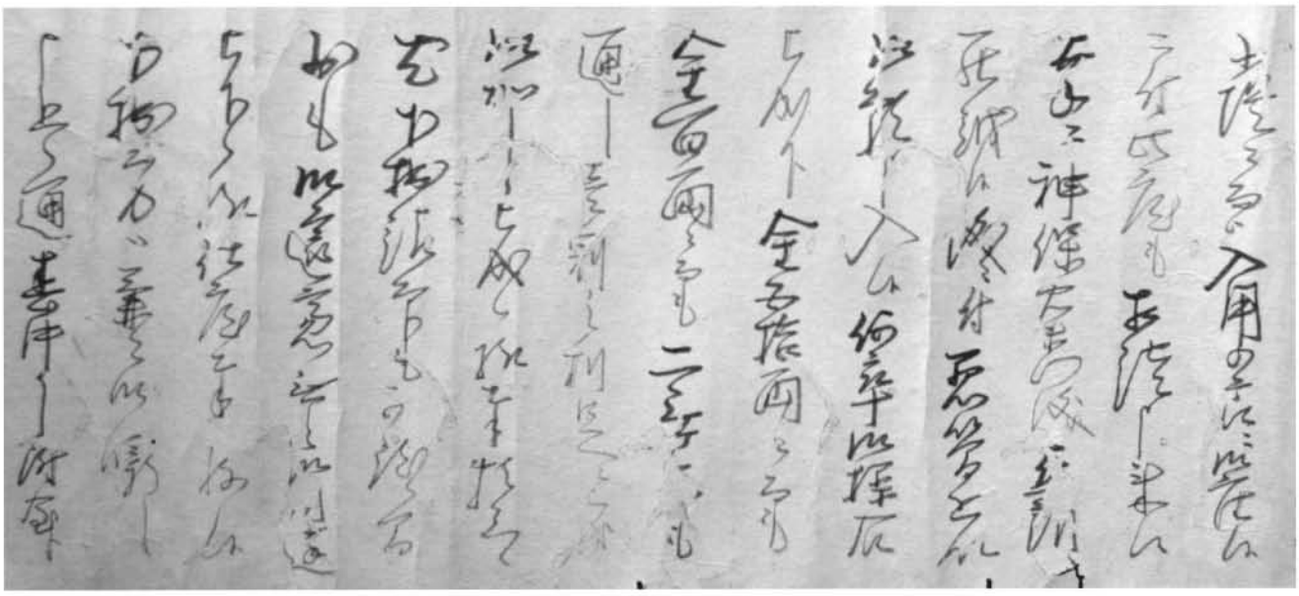
また、多古町の有力門人、貴族院議員五十嵐敬止の書簡もあった。五十嵐家は平山家と並ぶ多古町の旧家であり、これから紹介する伊能忠敬書簡の宛名五十嵐佐市は敬止の曽祖父にあたる。この書簡の所蔵者は五十嵐家の現当主久氏(成田市在住)であり、成田市立図書館に管理を依託している。

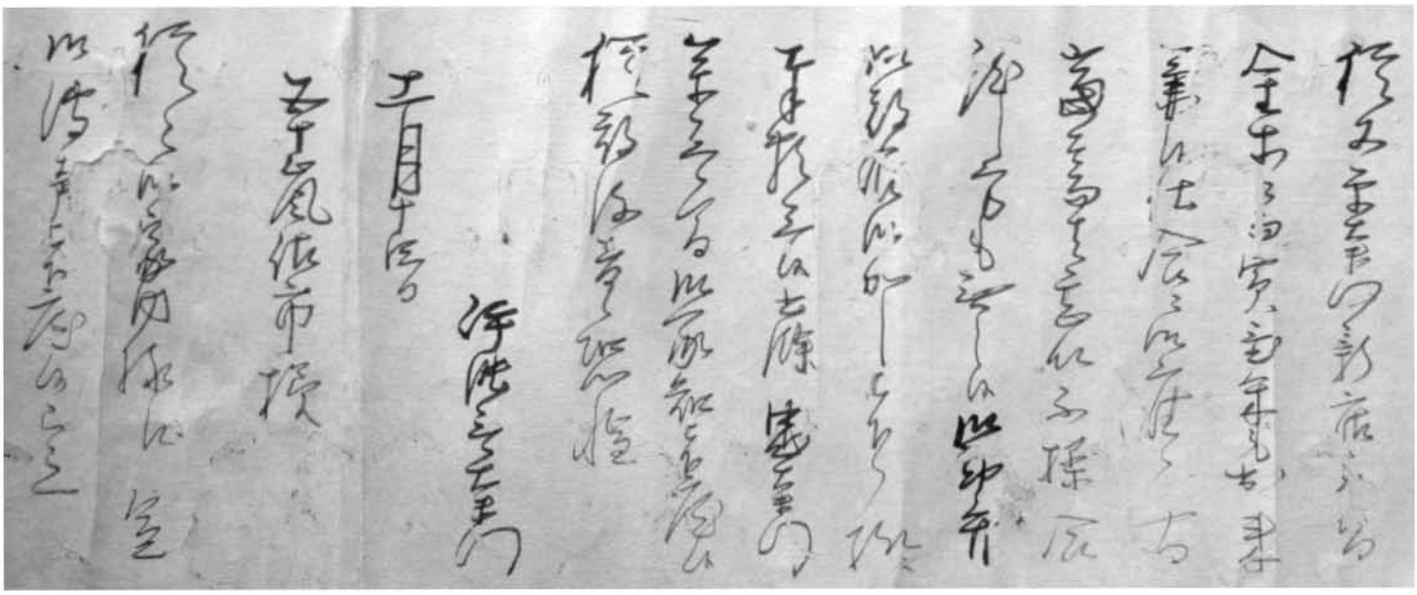
この忠敬書簡は地元の人々にはよく知られており、さきの室岡慎二氏や地元の忠敬研究家伊藤一男氏が『成田市史研究』二五号、二七号(成田市教育委員会、平成十三年、平成十五年)に「多古の素封家-市内で伊能忠敬の書状発見-」(室岡慎二)、「伊能忠敬の書簡と周辺事情-個人情報から地域史料への模索-」(伊藤一男)を発表している。しかし、当会「伊能忠敬研究会」の皆様や全国的には余り知られていないので、ここに改めて書簡の印影と翻刻に二、三の解説を付記して紹介したい。詳しいことは、さきの二氏による論稿を参照されたい。



伊能忠敬書簡　五十嵐佐市宛







一筆致啓上候、寒気
強相成候得共、愈御揃
御安栄可被成御暮、珍重
不少奉存候、先達而者
参上緩々得貴意、殊ニ
御馳走ニ罷成千万忝
奉存候、夫〻小堤片貝
粟生ニ六日逗留、太田江
罷越し二日止宿当月
朔日ニ帰宅仕候、貴公様ニも
廿八日当所江御光来
被成候様ニ御噺も御座候間
帰家早速承候所御出も
無之、其後御心待申候へ共
御繁用ニ御座候哉、今以
御光来も無之候
一、小堤村神保理左衛門方
当年酒蔵普請新方ニ
出来、地行等迄致候ニ付
物入多相掛、酒造米
買入金不足ニ御座候間、
何卒、貴公様江御無心
申上呉候様、先日罷越候
折ふし、無據被相頼候、
貴公様御光来ニ候ハ、、
御面談可申上ト御待申候へ共、
段々御延引ニ罷成、殊ニ
小堤ニ而ハ入用の節ニ御座候
ニ付、此度も相談申来候
幸ニ、神保忠右衛門儀在所へ
罷越候儀ニ付、愚簡を以
御願申入候、何卒御操合
被成下、金五拾両ニ而も
金百両ニ而も、二三ヶ年も
通し、壱割之利足ニ候故、
御加し被成候様奉願上候、
尤下拙請印も可致候間、
少も御遠慮無之御用達
被下候様仕度奉存候
下拙方ハ兼々御噺し
申上候通、春中申附置及候、
猶又、平右衛門新店ニ取替
金等ニ而買置米も出来
兼候仕合ニ御座候間
当暮ハ甚以不操合
致し方も無之候、御勘弁
御都合御加し被下候様ニ
奉願上候書余、忠右衛門
参上候間、御承知被下度候、
猶期後音候、恐惶

伊能三郎右衛門

十一月十四日

五十嵐佐市様

猶々御家内様江宜

御伝声被下度候

已上

この書簡の発信年代は寛政二年、忠敬四五歳のときのものと推定される。その理由は、書簡の前半部にある「夫〻小堤、片貝、粟生ニ六日逗留、太田江罷越し二日止宿当月朔日ニ帰宅仕候」の記事と付合する資料が九十九里町粟生の「飯高家御用留」にあるからである。そこで忠敬の「莫逆の友」とされる九十九里浜の網主飯高惣兵衛の記録した寛政二年の「飯高家御用留」(九十九里町誌資料集 第七輯上巻 昭和五十一年、九十九里町)から関連記事を抜萃して紹介する。

(十月)

廿四日晴　佐原三郎右衛門新屋着、鯉二喉被恵
廿五日晴　夕方三郎右衛門入来泊、弥兵衛弥右衛門同道
廿六日晴　同人滞留、盛右衛門〻久兵衛へ状内見
　廿四五両立替政四郎分有之由
　官中要録四十五巻、合壁論五巻、三郎右衛門へかし
廿七日晴　同人同道新屋へ行、政四郎一件噺有之不頼趣申候

このように書簡の日程と一致することから、寛政二年の書簡と考えて間違いなかろう。なお、「夫〻」(多古 五十嵐家より)とある小堤は、忠敬の兄貞詮の神保家であり、片貝は忠敬の長女いねの嫁ぎ先布留川盛右衛門、粟生は勿論飯高惣兵衛、太田は次女しのの嫁ぎ先加瀬修助であろう。

最後になったが、文書所有者の神保誠氏、五十嵐久氏及び千葉県文書館、成田市立図書館の御協力に深謝したい。

連載　改題

高橋（景保）御用日記より（四）

渡辺一郎

はじめに

安藤由紀子（故人）さん解読の高橋御用日記をもとに、第六八号まで三回にわたって連載したが、今後は史実的に面白い部分だけをとりあげ、わかりやすく書いてみたいと思う。

文化二年九月廿一日
（市野金助出勤届について、所属する番方の上役三宅助之丞からの問い合わせに対し、回答する。）

・・前段省略・・私方ニ而ハ何れ明日にも御届可申存居候　貴公様ニ而も御届有之候義と存候段　右　中嶋長三郎を以及返事候事

一、今夕秋山江罷越　右金助出勤之義御届可申哉之段承リ候処　松之亟申聞候ハ急度御届ニも及間敷　尤此儀金助出勤已前　出勤可為致哉伺之上出勤致候方宜敷候　併前后ニ相成候事故致方も無之候　金助頭より急度御届申上候ヘハ此方よりハ御城江罷出候節
　明日ニ不限口上ニ而御届申候而可宜段　被申聞候事
一、今日より金助出勤

六八号で扱った末尾の部分を思い出してほしい。

過去の伊能研究では、第五次の紀伊半島測量ではベテランの内弟子と伊能隊に配属されていた下役が衝突したといわれていたが、尾鷲の大庄屋土井徳蔵家文書と高橋御用日記、測量日記をよく読むと、実は、尾鷲で衝突したのは、忠敬と下役の市野金助であることが明らかになる。

忠敬は、市野が無断で沿道へ出した（と思われる）心得触れ撤回の指令を出し、尾鷲の大庄屋に伝達を命じた。しかし、市野は謝らず、翌日から病気と称して隊務を離れ別宿をとる。上司の命に従わず、勝手な戦線離脱である。軍陣であれば処断されても致し方ない所業と思う。

多忙な忠敬に散々手数をかけさせ、江戸帰府の手続きを終えて江戸に戻っていった。

高橋景保も頭にきて、お役御免にしようかと考えたが、補佐役の間（はざま）に止められる。間は、預かっている下役は傷つけてはいけない。たいした役に立たなくても、褒めあげて褒美をもらえるようにして使うものだ、という商人的考えの持ち主だから強く諫めたろう。

何事も間が頼りなので、景保は承知するしかなかった。

江戸へ戻ったら、もともと仮病なので、すぐ回復する。出勤をどうするかと、本属の御先手組の御頭の三宅助之丞から、書状で問い合わせてもらっている。まさに、老獪な小役人だ。自分で景保の前にひれ伏して尋ねればいいだろうに。

大阪歴史博物館蔵　間　重富　肖像

景保は若者らしく、首にしないことにした以上は、出勤していいよ、と簡単に承知する。そちらも届けの都合があるでしょう。こちらは明日にでも届けを出すと下役から返事を出させる。

市野は廿一日から出勤。しゃーしゃーと出てきたのだろう。別資料によると、首をつないで呉れた間が、詳しい経緯をいくら聞いても、病気だったというばかりで、何も言わなかったという。あきれ果てた黙秘権行使である。

景保の方は、夕方、届けの出し方について奥祐筆組頭の秋山松之丞の自宅へいって尋ねる。

秋山は「市野を出勤させるのは急ぐことではないし、事前に伺うべきことだったよ。しかし許可してしまった後では仕方がない。市野の御頭から届けがでるのだから、こちらは、登城の際、口頭で届ければよい。扱ってあげよう」

と引き取ってくれる。

同廿二日
一、吉田氏今日被致登城候ニ付　金助出勤御届ヶ之義相頼候ニ付　於御城松之亟江其段申聞候処
摂津守殿御忌中御入込ニ候間　内々拙者心得居御出勤次第可申上旨松之亟申聞候由

天文方同役といっても先輩の吉田（勇太郎）氏が登城するので、金助出勤の届をお城で奥祐筆の秋山に申し入れて貰ったところ、若年寄堀田摂津

守は忌中の入込があるので、内々拙者（秋山）が心得ておき、御出勤次第申上ると正式に引き受けていただく。

昨夜の秋山訪問は、内々の根回しで、この日の吉田の城中における秋山への申し入れは天文方を代表して正式な届けを出したというべきであろう。秋山は昨夜お願いしたとおり引き受けている。

これまでに、奥祐筆組頭の秋山が大分登場しているが、秋山は伊能測量の影のキーマンというべき人物である。奥祐筆については別にまた書きたいと思っているが、概略を記しておく。

旗本の役職のうち最も付け届けの多い役は長崎奉行といわれるが、奥祐筆組頭は長崎奉行につぐ付け届けの多い役職という。

表祐筆は文字通り祐筆で書き役である。しかし奥祐筆は老中・若年寄ら幕府閣僚に属し、前例の調査とか、政務についての諮問を受け、老中・若年寄の発する文書の起案などをおこなった。

組頭は二名で家碌のほかに役料が二百俵つく。身分はあまり高くないが、部下の奥祐筆が数十名いて業務を分担していた。

老中・若年寄は有能な譜代大名から任命され幕府を運営する要職で、現在の閣僚に相当する。

しかし如何に有能といっても大名は跡を継いでなるもので、下からいろいろな経験をして就任するものではない。実務的な判断をどうやって下していたか、以前から疑問に感じていたが、伊能測量に関する幕府の意思決定の経過を、測量日記や高橋御用日記から調べていてはっきりした。

幕府政務の総合的な判断をする老中・若年寄のスタッフは奥祐筆なのである。政務秘書のようなもので、わからない案件は奥祐筆に聞けば、前例を調べ、然るべき意見を提出してくれる。

納得がいけば、これを同僚と評議または文書承認を求め、幕府の意思とする、というシステムだったらしい。

幕府領の経営や年貢の収納は、郡代、代官などを統括している勘定奉行が担当、司法機能は評定所（目付、町奉行、勘定奉行などで構成、事務局の留役は勘定奉行配下の旗本役）が扱い、警察機能や業務監察は町奉行（江戸府内）、目付（旗本・御家人など武士を対象）、大目付（大名の監察）と担当が分かれており、これら役所には多数の属僚がいて、新米が長官になっても補佐して貰える仕組みとなっている。

幕政全般を統括している老中・若年寄には、すべてにまたがる事項とか、どこにも属さない事項がいつも起こっているのではないだろうか。たとえば、大名家の転封、お手伝い普請の割り当て、騒乱鎮圧の出兵命令、などが考えられる。規模は違うが、伊能測量も各部署に関係する前例のない事項だったろう。

景保は何事によらず奥祐筆組頭の秋山に指導を受け、秋山は堀田摂津守正敦に内意を伺って処理していることが多い。市野の出勤許可については、秋山は「それはまずかったよ」とダメ出しをした上で、みずから収拾にあたっている。

景保は批判も多い人物だが、このころは一生懸命、走り回って仕事に精だしており、若いのによくやると、周囲のみんなから応援を受けていたようだ。ある意味で若者の特権とも思うが。

夜分、内々で秋山宅を訪ねて教えてもらっているが、これはいくらでもあった話で、要職の役人は自宅でも沢山の人にあって、内々の話をしており、この時代から根回しがよく行われていたことがわかる。

景保はしがない下級の旗本で付け届けなど碌なことはできないだろう。しかし仮定の話だが、もしお手伝い普請を先送りしてほしい、などという藩の留守居役のお話だったら、大名家から結構な手土産持参でお願いがあってもおかしくはない。老中・若年寄に直結する重要ポストだった。

測量関係の諸手当て、地図仕立ての手当てなどは、忠敬が秋山を訪問してお願いし、大体、ここで決まっている。忠敬は測量から帰着すると、真っ先に土産物を持って帰着挨拶に出ている。

同廿九日
一、　登城　　勘解由御用先江書状差出ス　　是ハ
去廿一日暁　　坂部貞兵衛妻女子出産ニ付　　其
段申遣ス　　此壱封御勘定前田平右衛門江相渡
此状ハ城州伏見江遣候事御勘定所江之添状例之通

坂部貞兵衛の妻が女子を出産と現地へ御用状で知らせる。

十月三日

大津郡代石原庄三郎手代石井甚蔵から勘解由よりの御用状が届く。

下役中嶋、田中の名前で次の返事を出す。この書状は、長い長い忠敬からの要請状だった。

御手紙致拝見候　然ハ測量御用先大津宿伊能勘解由より之御用状壱封　昨夜御到来ニ付御届被下慥ニ致落手候　右貴報如斯御座候　以上
十月四日

手紙の内容は、すごく長いのだが、中国筋終了後一旦帰ることにした経緯を、景保側で整理して記載しているので、全文掲載し解説する。

右勘解由より差越候書状ハ　先達而此方より人増之儀可相成ハ四五人と被仰越候へ共　今六人も相増大手分ニ而相測候ハヽ、大ニ早く相済、病人も出来致間敷候

忠敬からの書状は、こちらから四・五人増員しては、といったのに対し、六人増員して大手分ければ早く済むでしょう。病人も出ないでしょうという。

此間被仰越候趣ニ而は、四五人相増、三手ニ分ケ一手休番ニて、地図仕立させ、二手ニ而、測量可有之趣　左候へハ、西国早く相済候儀は有之間敷旨、上江之申立も無之間、六人も相願候方可然候

四・五人増加して三手に分け、一手は休んで地図を仕立て、二手で測量するという案では、早く済むということにはならないでしょう。上への説明も要らないと思いますので、六人でお願いします。

若願不相叶候ハヽ、無致方　中国筋不残相済候上　一先帰府致方可宜段申遣候処　承知之趣ニ而候へ共　大手分之儀ハ別手之頭取無之、貞兵衛申談候処、是又勘解由と長く相別れ、弟子共支配致候義、難出来　相断候由ニ而、何茂大手分之義は不承知之由、且又若願不相叶候ハヽ、中国相済次第帰府之義、是ハ一統承知之由、於勘解由も兼而相望処之由申来

もしお願いが叶わないなら中国筋の測量が終わったあと、一旦江戸に帰っては、と申された事については、みんな承知の趣ですが、大手分するには、別手の責任者がおりません。坂部に相談しましたが、私と別れて長期間（忠敬の）内弟子共を統括するのは出来かねると断られました。

願いが叶わなかったとき一旦江戸に帰る件については、全員が承知ですし、私も希望してきたことです。と申します。

東嶋平橘鍋島家来儀は象限儀をも所持致居候へは、増人人数へ相加大手分之節、一手へ遣し候へハ極高も測量相成候間、可相成ヤ之段申遣候
平橘ハ兼々西国御用罷越度段申居候故也　右之者ハ虚弱なる者ニ而　殊ニ測量も不熟ニ候且大手分も相止候ハヽ、象限儀も不用ニ候間、右之者ハ用捨致呉候様申来ル。

佐賀藩士の東嶋平橘は象限儀を持って参加するといっており、大手分の別手に加えれば極高（緯度）の計測もできるし、どうかと聞いたところ、彼は虚弱で、測量も不熟練、大手分をやめれば象限儀も不要。この者はやめて下さいといっています。

別儀

頭注に小さく別儀と書かれた記事が以下に続く。景保の迷いを書き、奥祐筆組頭の秋山に相談する経過を記している。

人増之儀　五郎兵衛共段々及相談候処、第一可差遣者も無之、縦令罷越度申候者幾人も有之候へ共測量之儀不熟、其上虚弱、或筆算等未熟之者而已ニ而　相応之者無之、縦令此方ニ而此者は宜敷と存遣候而も　或ハ勘解由之心ニかなわす　或存外御用先ニ而不用立者有之候節は何角心労も可有之

増員のことを間五郎兵衛と相談しましたが、そちらに派遣すべき人材が見当たりません。測量に参加したい者は数人いますが、測量の技術が未熟、体質が虚弱、あるいは筆算が未熟な者ばかりで、人材がありません。

又こちらで、この者ならと思っても、勘解由の意にかなわなかったり、予期に反して現場で役に立たなかったら、その気苦労は大変です。

且又人増願之節　願書ニ当春申上候趣ニ而ハ三十三ヶ月程相掛リ候ハヽ、不残相済可申段申上候処　西国ハ東国と違　存外屈曲多く御座候ニ付　既ニ大坂迄ハ当五月頃ニハ可罷越奉存候之処　八月下旬ニ相成　見込とハ相違仕候

且つまた、願書で当春には、三十三ヶ月ほどかかれば、西国は残らず測量できると（上に）申し上げましたが、西国は東国と違って（海岸線の）屈曲が思ったより多くて、大阪へは五月頃つく予

定でしたが、八月となり大幅な見込み違いを生じています。

右之通ニ而不残相済候義ハ当春申上候一倍も相懸リ可申　左候ヘハ罷越候者共病人も出来可仕既ニ下役市野金助義於紀州路難所　病気相発帰府仕候ヘハ四国九州辺ハ別而風土相変候間　病人も出来可仕　是而已勘解由義心労仕罷在候右ニ付可罷成御儀ニ御座候ハヽ　私弟子共之内今六人御増被下差遣し申度奉存候　病気之者も少々可有御座　且年数も凡明後卯年中ニハ相済可申哉と奉存候間　此段奉願　此振合ニ何茂難所昼夜骨折候事共委細相認

このような次第で、全部測量を終えるには当春申し上げた日数の倍もかかりそうです。病人も出ており、下役市野金助は紀州の難所で病気を発し帰府しました。

四国九州はさらに風土が変わるので、病人も出そうです。勘解由はこれのみ心配しております。そこで出来ましたら弟子共の中から六人を遣わしてほしいといってます。

そうすれば明後年（文化四年）中には終了するのでお願いします。その積もりで難所の測量に一同頑張っていると、詳細を書いてきています。

ここまでは、忠敬の希望をメモしたのみで、景保の意見ではない。忠敬の見通しはこの時点でも、なお楽観的だった。第二次九州測量の終了は文化十一年五月だから、この時点から更に九年かかっている。よくプロジェクトが中止にならなかったと感心する。正確な地図への期待が大きかったとしか言い様がない。

右も豫振合ニ而可申上候ヘハ　若奉願候上人増出来ニても若明後年中ニも出来兼候ハヽ、お上江之申分もなく　且又当春願之節勘解由内弟子共ハ国元江引込　或ハ養子　或ハ家督相続ニ而四人ならてハ無之段申上候ヘハ今私弟子遣度と申候而は　夫なれハ当春手附之者不遣其方弟子を遣スへかりしをと　上の思召も如何ニ候ヘハ内々秋山江罷越右之委細相談　且秋山之言語之臨機応変ニ而　人増願候而も宜様ニ松之亟申候ハヽ増人可奉願と懇談之処

右に関していえば、願いどおり増員ができたが、明後年中に終らなかったら、上には申し訳ができない。また当春申請のとき、忠敬の弟子たちは国へ引っ込んだり、養子にいったりで、四人しかいないと申し上げている。

いま弟子たちを遣わすと申すと、それなら当春下役を出さないで、弟子だけで出かければよかったのにとなり、お上の思し召しがどうなるか、と心配だ。秋山に詳細を話して内々相談したところ、「言葉は臨機応変でよい。増員をお願いしてもよいのでは」という。それでは増員をお願いしたいと話し合う。

今日勘解由方より大手分不承知　且中国仕廻次第一先帰府之方宜敷段何も同意之由申来候ニ付弥人増は可相止　五郎兵衛并自分共存寄也何れ秋山之存寄ニ従ひ可申と　桑原隆朝抔も申聞候ニ付　今七ッ時頃より　五郎兵衛同道ニ而秋山へ罷越　右之次第委細申談候処　松之亟申聞候は

そのところへ、今日忠敬から、大手分けは取りやめ、一旦帰府したいといってきました。それでは増員は中止しようというのが、間と自分の気持ちです。

いずれ、秋山と相談して、彼の意見に従うのがいいだろうと桑原隆朝もいっています。今日夕方七つ時、間五郎兵衛と一緒に秋山を訪問し詳細に説明して相談しました。

右之義先日よりも　此方ニ而も相考候処何レ中国不残相済候ハヽ、一先帰府いたし　勘解由之気ニ入候者を見立又罷越候方可然存候　貴公方ニも其思召ニ候ハヽ　先内々摂津守殿江右之段伺見可申候　尤上之御賢慮ニ而人を増可遣と可被仰事も難斗候　左候ヘハ人増相願可申方可然　何レ伺之上此方より否可申進段　松之亟被申聞候　委細ハ難述草紙故略之

秋山は「そのことについては、こちらでも考えたが、中国筋を終わったところで一旦帰り、忠敬の気に入った者だけで隊を作って、再度出かけた方がいいと思っていた。貴公らが、そのつもりなら、内々で堀田摂津守殿へ伺ってみよう」

「上の方の考えで、（増員して）一気に済ませた方がいいといわれるかも知れないが、そのときは増員願いを出しなさい。いずれ、上の考えを聞いたあとで、お知らせする」

とのお話をいただいた。委細は色々あるが、述べにくく、メモなので、省略する。

天文方という独立した専門部署ではあるが、微

禄の幕臣（百石）である高橋景保と統括している若年寄堀田摂津守（大名）の間で、役料二百俵の奥祐筆組頭が、細かく事情を聞いて、閣僚の一員である堀田との間を取り持っている。見方を変えると奥祐筆組頭は老中・若年寄に何でも進言できる立場にあったようである。

二〇歳そこそこの、高橋景保が伊能隊の後方支援が出来たのも、桑原の線から堀田摂津守に直接の頼みごとが出来、奥祐筆組頭から実務的にはよく面倒を見て貰ったからだと思われる。

同十一日
一、此間秋山江申入置候勘解由西国御用増人之儀　摂津守殿江伺呉候哉之段　今夕方松之亟宅江問合旁罷越候処　松之亟申聞候ハ此間五郎兵衛と御同道ニ而御談有之候義　委細摂津守殿江申上候処　御尤思召ニ而何レ其口上之趣書取伺書可差出旨被仰候

十一日になって、この間、秋山に申し入れておいたことを摂津守殿に伺ってくれたかどうかを問い合わせに夕方、秋山宅に出かけたところ、秋山は「間五郎兵衛と一緒に来て話したことは、摂津守へ申し上げたところ、尤もだ、その願いを伺い書に書いて提出するようにと仰せられた」

尤其上ニ而評議之仕方も可有之段　御達之由なり　尤摂津守殿思召ニ而ハ　人増ニ致四国九州共一時ニ為相廻度被思召由なれとも　多分中帰リニ可相成段　松之亟内々被申聞候　松之亟存寄ニ而ハ中帰り之方可然趣なり

その上で、評議をするとのお達しだった。もっとも摂津守個人のお気持ちでは増員して四国九州も一挙におこなった方がよいのでは、というお考えのようだが、多分、一旦帰府することが了承されるだろうと秋山から内々で見通しを伝えられる。

秋山は一旦帰府を認めるべきだと進言し、摂津守も内諾を与えたようである。

ここまでは秋山の仕事であるが、一般論でいうと提出された伺い書は、老中の稟議にかけられ書面で決裁されたと思われる。ときの老中首座は松平伊豆守信明で三河吉田藩主、松平定信が信頼して引き継いだ実力者だった。

物議の多い第十一代将軍徳川家斉も松平信明健在な前半は勝手なことは少しも出来なかったという。将軍を抑えこめる実力者だったらしい。

水戸藩の儒者小宮山楓軒によると、第一次測量の伊能図を信明が見て、これなら、三年もあったら、関東一円の図もできるだろう、といったところから伊能測量が始まったという。

これは噂話に過ぎないが、伊能測量に理解があったことは間違いあるまい。松平信明も伊能測量を支えた人物の一人だったと思う。

摂津守はおそらく真っ先に、松平信明の了解をとり、それから稟議書を回しただろう。堀田摂津守は文武両道に優れ、四三年間、若年寄を勤めた能吏だったという。

十月十三日
一、御用先伏見より九月晦日出ニ而　御用状到来　伏見奉行加納遠江守より達ス　但用人より添手紙来
坂部貞兵衛より伏見より先々江遣し候先触写差越ス
（先触れ写しは省略）

山陽道へ発した忠敬の先触れの写しが、大名役である伏見奉行から転送されてきた。江戸発は勘定所の旗本が扱っているが、地方発は領主が扱った。江戸藩邸の用人が添え状をつけて使いの者に持たせている。

重要な通知は江戸留守居役自身でとどけている。内容的には、隊員の個人通信や忠敬の私信も含め大きな紙包みになっていた。

同十五日
一、吉田氏今日登城ニ付、中帰り伺書持参呉候様相頼、尤自分可出候処面部腫物発シ難出故吉田氏江相頼ム即伺書左之通

言われたとおりに伺い書を書き上げ、登城する天文方の吉田氏に提出を依頼する。顔に腫れ物がでて自分で出かけ難いという。吉田氏は東日本の伊能図にも署名がある吉田勇太郎であろう。

次頁に伺い書の全文を控える。内容はこれまで述べてきたことを文書化しただけなので、解説を繰り返さない。

はじめの方に氏名の脇に小さく「書面伊能勘解由儀中国筋測量相済候上一口帰府為仕度段奉伺候通被　仰渡奉畏候」と書かれているのは、「承り附け」といって伺い書が決済になったとき、請け書のような形で書

いて差し出すらしい。

書面伊能勘解由儀中国筋
測量相済候上一□帰府為
仕度段奉伺候通被　仰渡
奉畏候
十月廿六日
高橋作左衛門

折掛無之
一通物

私手附伊能勘解由義、西国為測量御用罷越候処
難所多く果取兼候二付　中国筋測量相済候上　中
帰り為仕度奉伺候書付
高橋作左衛門

私手附伊能勘解由儀　西国筋為測量御用　当二月
江戸出立仕　東海道筋并今切入海　夫より勢州
桑名江出　勢州志州并小嶋共測量仕　当六月
中旬紀州熊野浦江取掛り候処以之外大難所二而存
外日数相掛り候内　附添罷越候者共　山海之
気并暑熱二相感し

追々病人出来仕候趣其頃申越候　当七月下旬
漸ク熊野浦測量相済　同国并泉州西面海辺小嶋
共相測リ大坂江出淀川筋京都より江州湖水江罷越
九月下旬右湖水不残測量相済申候

夫より若狭路江罷越可申候処　冬二向ひ難所
雪多ク御座候上　隠岐渡海も難相成趣二付
引返シ宇治川筋より摂津尼ヶ崎辺迄此節罷越
測量相済　此節より播州江向ひ　中国筋南面
海辺江罷越可申積リ二御座候

前文申上候通　勘解由儀熊野浦辺二罷在候頃
より追々申越候は　紀州熊野浦之義は兼々難所
之様子二承リ及罷越候之処　存外広大難所言語
を絶し且又追々承合候処　中国筋　四国九州
等之海辺ハ広大難所并嶋々多ク御座候由

僅之熊野浦さへ日数一倍も最初之見込と相違
仕候二付　附添之者何茂先キ々限リも無御座様
二相心得　自ラ気力も相緩ミ　病人出来仕候
儀二も可有御座哉二奉存候

此上ハ増人五六人茂相願手配リ仕候ハ、　御
用済も果取可申哉之段　差添罷越候もの共江申
聞候処　当時其儀を力二仕何茂骨折昼夜出精仕
少々之病気等をも不相厭楽々相励　御用相勤罷
在候

尤右之通難所多く御座候二付最初積立之日数相
違仕奉恐入　其当惑仕罷在候間　何分勘弁仕
呉候様私迄度々申越候　右之通勘解由儀不得止
事申越候儀二付　増人可奉願哉と奉存　御用
立可申者相調候処

一両人ならては無御座候二付　増人難奉願
依之色々勘弁仕候処　たとひ御吟味御座候而　人数
有之被差遣候共多人数二罷成勘解由差配二当惑仕候而
は　却而手縺　見込と相違仕　果取兼候義も難斗
奉存候

必竟是迄病人出来候儀は手元之難所二当惑仕候上
前文勘解由より申越候通り　先々広大難所之儀追々
承知仕　行先二見切無御座候故

果しも無之様二奉存　自ラ気力たゆみ　病人も出
来候儀二も可有御座奉存候二付　此上は中国海辺
嶋々并隠岐等測量相済候上　一先帰府仕地図等相調
其上二而再二四国九州　壱岐　対馬江罷越候様仕度
奉存候

右之通二段二仕　先此度は中国筋　隠岐限二而帰
府二相成候へは　向二見切御座候故　何茂気力を相
増　別而出精仕　自ラ病人も希二相成可申哉二奉存
候

尤右之通中国筋　隠岐限二相成候而も　来寅年中
二は難相済　翌卯年二も相残可申奉存候　依之
先此度は中国筋并隠岐迄相測一端帰府仕候様仕度奉存
此段奉伺候以上
丑
十月
高橋作左衛門

右伺書十五日御礼之節　吉田氏御城江持参秋山松
之亟を以　摂津守殿江上ル　尤昨十四日秋山江内々
為見候所　随分宜敷段申聞候二付　今日上ヶ候事

提出の前日に、清書した伺い書を内々で奥祐筆組頭の秋山に見せて、いいだろうと了解をとっている。老中の決裁をいただくのは大変なことだった。

高宮家家伝薬に纏わる逸話

忠敬・稲女を偲ぶ会

高宮啓明・高宮　宏・高宮　勲

一、はじめに

平成二十二年九月二十八日、伊能忠敬研究会名誉代表の渡辺一郎氏とイノペディア編集幹事の戸村茂昭氏が高宮家に来訪された。

その時、忠敬につながる資料を求められたので高宮家家伝薬の版木(図1)と売薬御検査願(図2)の文書をみていただいたが、その由来を詳しく説明することができなかった。

この高宮家とは千葉県東金市にあり忠敬の曾孫が二人、すなわち稲の孫娘が相ついで嫁いだとされている家である(「伊能忠敬研究」特集号、二〇一一)。

高宮グループの「忠敬、稲女を偲ぶ会」では今迄高宮家に大切に保管されてきた家伝薬と忠敬との間になにか関係が有るのではないかと思い調べたのでここに報告する。

二、家伝薬蘇命丸、済生丸の諸国販売

高宮家の本家には、蘇命丸調合所について説明する版木（図1）が保管されている。それによると蘇命丸は江戸時代の地名で「上総国押堀邑」に調合所を有する「鷹見谷」で製薬している薬であるとされている。

また、薬の販売は、桑原隆朝邸（図3の①、八丁堀亀島町、後の地図御用所）や伊能忠敬の隠宅（図3の③、深川黒江町）に近い江戸小網町三丁目行徳川岸八幡屋長右衛門（図3の②）を取次所としていたようである。

江戸小網町と言えば、諸国物産の荷揚げ場所だけでなく、近くに漢方の総本山医学館や西洋医学の種痘所（後の西洋医学所）があり、感染症に苦しむ吉原遊郭も遠くない商業の盛んな所であった。また行徳川岸一角は大身大名の中屋敷、下屋敷が多い所でもあった。

高宮本家での蘇命丸の商いは何時から始められたか記録は無いが、（図1）の版木を解析すると

①「家伝」とあるが、この用語は明治三年(一八七〇)の売薬取締規則により、家伝・秘方の字句使用は禁止された。

②貨幣単位は「文」が使われているが、明治四年(一八七一)に新貨条例制定により、両から円に切り替わっている。

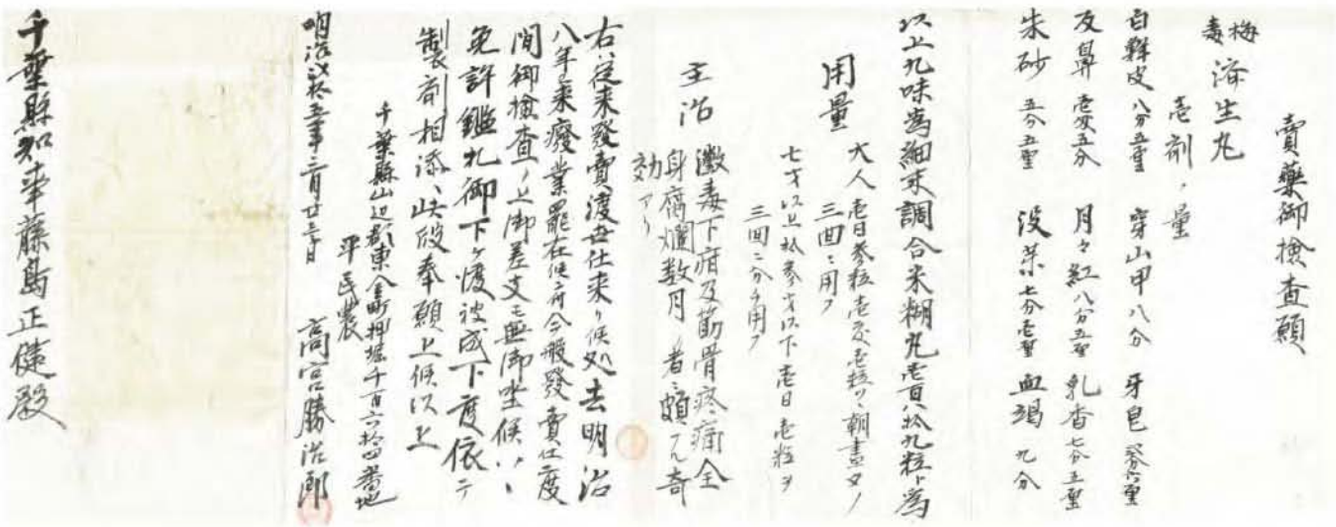
③「江戸小網町」とある。

以上①～③により、この版木は江戸時代につくられたものに違いない。従って、高宮本家での蘇命丸の商いは江戸時代から始まり、その後、図2の売薬検査願にあるとおり明治八年まで済生丸と蘇命丸を製薬していた事が判る。

一方、高宮分家は明治十二年に別家御届けを出し認可された。その時、済生丸が分家に受け継がれ、その後法律に則り済生丸の官許（図4）を明治二十五年(一八九二)に受け、「高宮済生丸本舗」製として全国に新聞広告を通じて通信販売を行い、昭和十六年(一九四一)まで続けていた。当時の製薬の道具や薬（図5）は、今でも一部残っている。

図1　蘇命丸調合所についての説明刷りだし

版木の写真は、墨一色になり文が読み取れないため、残された版木（70cm×50cm）から今回実際に刷りだした。



賣藥御檢査願

梅毒 濟生丸

壱剤ノ量

白鞣皮 八分五厘　穿山甲 八分　牙皂 拾分壱厘

反鼻 壱匁五分　月々紅 八分五厘　乳香 七分五厘

朱砂 五分五厘　没薬 七分壱厘　血竭 九分

以上九味為細末調合米糊丸壱貫八拾九粒ト為

用量　大人　壱日参粒　壱粒ヲ　朝晝夕ノ三回ニ用フ

七才以上拾参才以下　壱日　壱粒ヲ三回ニ分チ用フ

主治　激毒下疳及筋骨疼痛全身腐爛数月者ニ頗ル奇効アリ

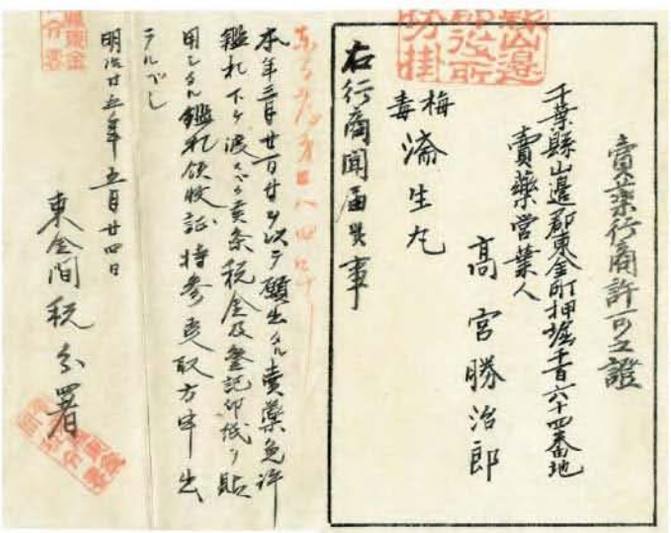
右従来發賣渡世仕来リ候処去明治八年ニ来癈業罷在候所今般發賣仕度間御檢査ノ上御差支無御坐候ハヽ免許鑑札御下ケ渡被成下度依テ製剤相添ヘ此段奉願上候以上

千葉縣山辺郡東金町押堀千百六拾四番地　平民農　高宮勝治郎

明治廿五年三月廿七日

千葉縣知事藤島正健殿

図２　売薬御検査願



賣藥行商許可之證

千葉縣山辺郡東金町押堀千百六十四番地

賣藥營業人　高宮勝治郎

梅毒　濟生丸

右行商聞届事

本年三月廿七日以テ願出タル賣藥免許鑑札下ケ渡ス可キ賣藥稅金及登記印紙ノ貼用シタル鑑札領收証持参之取方申出テ候也

明治廿五年四月廿四日

東金間稅分署

図４　済生丸の官許

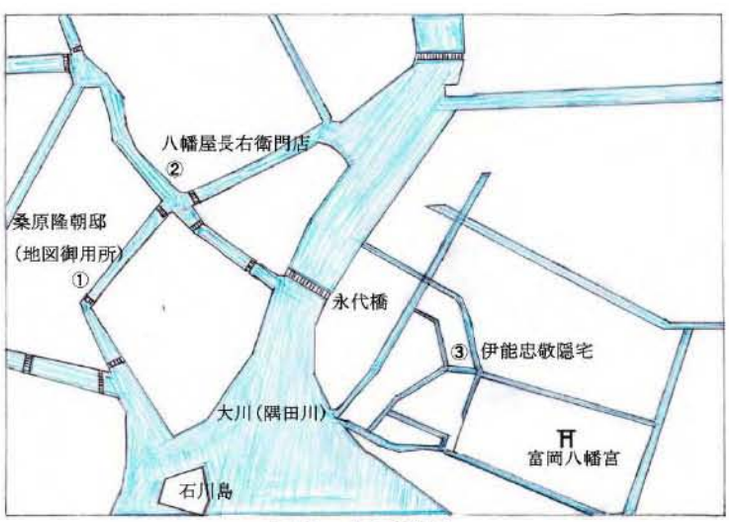


図３　江戸絵図

①桑原隆朝邸 ②八幡屋長右衛門 ③伊能忠敬隠宅

図５　薬研、箱篩、生薬

三、家伝薬由来の考察

昭和四十五年(一九七〇)頃、分家の宏は義父の文吉から家伝薬の錠剤作りの手解きを受けながら次のように聞かされた。

済生丸は梅毒の薬であり、九味（表参照）の方剤をするが、白鮮皮、穿山甲、猪牙皂、反鼻、月々紅、乳香、没薬、朱砂、血竭のうち反鼻の他はほとんど中東や中国などの外国産である。よく知られている没薬、乳香についてはキリスト誕生以来神聖視されてきた薬であり、その調合は忠敬の後妻の父が有名な医者で、忠敬は若い頃弟子になって真剣に修業をしており、その医者に大変信頼されていた。後年親子関係になったとき、この方剤は伝えられたもので、この調合は他人に絶対もらすなと義父の文吉から強く言われた。

平成二十一年(二〇〇九)「妙薬探訪」徳間書店笹川伸雄氏が来訪し、取材を受けた際薬袋と錠剤を求められたが、義父の言葉を思い出し、申出に応ずることができなかった。

名称	成分	効能
白鮮皮	ミカン科の多年草ハクセンの根皮	解熱・解毒
穿山甲	アリクイの鱗	消腫・排膿・解毒
猪牙皂	トイサイカチの実	消腫・去痰・解毒
反鼻	マムシの粉末	強壮・強精・冷え性
月々紅	月季花	消腫・解毒・月経不順
乳香	カンラン科乳香樹の樹脂	解毒・生肌・打撲
没薬	カンラン科没薬樹の樹脂	解毒・生肌・健胃
朱砂	硫化水銀	鎮静・めまいを治す
血竭	ヤシ科キリンケツガシの樹脂	止血・防腐・生肌

表　済生丸の方剤

一方、高宮本家の蘇命丸は「見目定め」や「命定め」といわれた疱瘡麻疹の薬で、江戸時代ともに恐れられた感染症で、門外不出の秘薬として伝承されてきたものである。

これらの薬が百姓でもある名主の高宮家においてどのようにして調剤を始めたのかの確かな証拠は現在の所わかっていない。しかしながら、高宮家は名主でもあったことから初代からの系図が残されている。東金市史の史料篇にも高宮家の四代までの歴史が詳細に書かれており、その中には医学薬学系の関係者は見当たらない。

ところが、高宮宏が義父の高宮文吉から聞かされた「忠敬の後妻の父が有名な医者云々」と言えば、医者は仙台藩医の桑原隆朝であり、忠敬の後妻とは信女ということになる。そして、高宮家五代藤右衛門広成に弘化二年(一八四五)に嫁してきた嫁は忠敬の曾孫である折枝が居るのである。

忠敬の長女稲は夫の盛右衛門と寛政四年(一七九二)頃、江戸小網町（図3の②）に分家し米穀商をしていた。その後、寛政八年(一七九六)九十九里町片貝に移り米穀商「加納屋」を開業、稲生勘兵衛を名のる。この頃から上総国押掘邑の名主である高宮本家と加納屋との間で米穀の取引があったと言い伝えれている。そのことが縁となったと考えられるが、稲生勘兵衛・稲の孫である秀が先ず高宮家五代藤右衛門広成に嫁し一女をもうけたが秀は間もなく没してしまった。その幼子の養育のため、秀の姉である折枝が後妻として高宮家の人となった。この折枝は当初幕臣直江一修に嫁し江戸で生活していたのであるが、後になって九十九里町片貝で医業に従事していた。

仙台藩医の桑原隆朝から忠敬、忠敬から稲に受け継がれた門外不出の方剤は二代目勘兵衛を経てから折枝に渡され、直江一修の医業に役立てられたのであろうか、そして、直江の死去後、後妻として高宮家に嫁したことから、家伝薬蘇命丸、済生丸として高宮家に脈々と受け継がれたものと考えられる。

四、おわりに

家族から病弱といわれていた忠敬が日本全国を測量できたのも、医師志望で体得した医学、薬学の知識技能が役立ったと思われる。

高宮家の家伝薬は、義父の口伝のとおり、秀・折枝を通して忠敬からの伝承によるものと強く推測できる。

最後に高宮家家伝薬由来の公表を機に新しい史料が見つけ出される事を願って止まない。

本稿のまとめに当たり、ご指導戴きました渡辺一郎伊能忠敬研究会名誉代表と戸村茂昭イノペディア編集幹事のお二人に心から感謝申し上げます。有難うございました。

文献、資料

○中国薬学大典図説漢方医薬大辞典
○大江戸今昔マップかみゆ歴史編集部
○蘇命丸調合所の版木
○済生丸の売薬御検査願
○新考伊能忠敬、伊藤一男　崙書房出版
○偉人伊能忠敬翁とその子孫　平　柳翠
佐原興業合資会社
○東金市史　史料篇一

参考　高宮家、稲生勘兵衛家について

渡辺　一郎

高宮家の秘薬が江戸で売られており、その根源が伊能の後妻（お信）から伝えられたという伝承があると聞いて驚いた。早速、東金まで出かけて高宮宏さんに確認したのであるが、秘薬の処方は忠敬の後妻から伝えられたという伝承は間違いないとのこと。

早速関係者の年譜を重ねてみると、時代的にはつながるのである。

お稲が勘当された時期は、史料では特定できていないが、忠敬の隠居（寛政六年）前年の店卸帳では加納屋（お稲と盛右衛門の江戸店）との取引が記載されているから、寛政五年までは正常な状態にあったと推測される。

忠敬の江戸出府は寛政七年であるから、江戸へ出て帳簿を調べた忠敬が大穴があいているのを発見して、盛右衛門を離縁し、お稲は夫についてゆく、といって勘当（正確には久離か）された可能性が高い。

そう考えると、お信とお稲は五年ばかり伊能家に一緒にいたことになり、勘当されたとき、お信は存命中だった。（年譜を参照）

＊

忠敬が若いとき医術を学んだという点には異論はないが、忠敬が桑原隆朝から学んだという点については、しっかりした証拠が必要と思う。桑原隆朝は伊能測量のキーマンの一人である。

忠敬まで持ち出さなくても、お信が忠敬に嫁入りするとき、名医である父隆朝から家伝の秘薬の処方の一つ二つ渡されてもおかしくはない。万が一の場合の足しにせよ、と嫁入りする娘に、財物や、内緒の金子を持たせることはいくらでもあったから、それが秘密の処方箋であっても、不思議はないと思う。

盛右衛門は離縁されても、数歳のころ家を出ているのだから、帰る先は無きにひとしいだろう。まず生活の不安があった筈である。

「暮らしの足しにしてね」と、婦道を立て、覚悟して、夫に従ったお稲に、義母の立場でお信が秘薬の処方を渡したという仮説もありうると思う。

＊

九十九里の生誕地公園にたつ徳富蘇峰筆の忠敬の顕彰碑には大庄屋だった高宮家と並んで、盛右衛門末裔の稲生勘兵衛家が名前を連ねている。

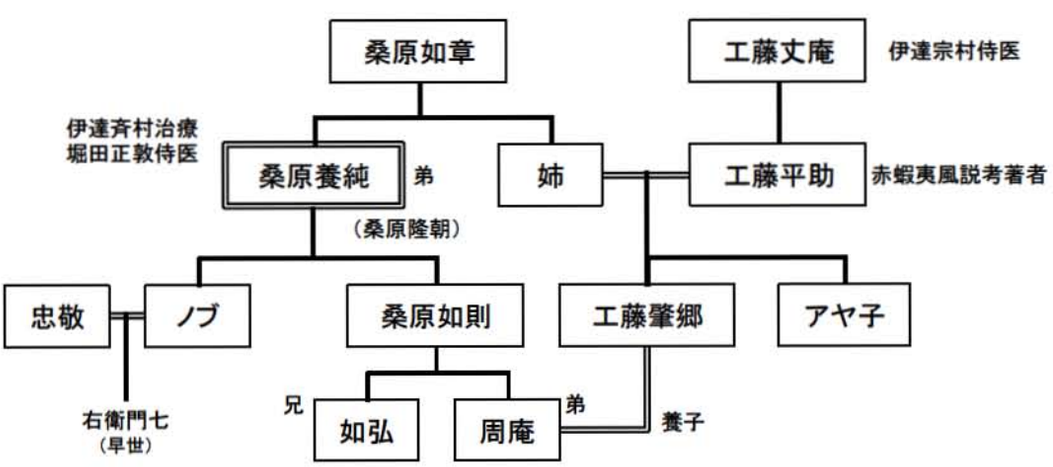
連綿と稲生勘兵衛家が続いているということは盛右衛門は事業に成功し、家運を挽回したと考えていいだろう。高宮家と縁組できたのもその一つかもしれない。

個人的な推測では、盛右衛門は九十九里へ帰って、忠敬の畏友である飯高惣兵衛の庇護をうけていたと思われる。九十九里へ戻って米屋をやったと、これまでの忠敬伝では簡単に記すが、破産して離縁された男に開業資金が調達できるとは思えない。米屋は資本のいる仕事である。

お金持ちがバックアップしてあげないと成り立たないお話である。その人物は見渡すかぎり飯高惣兵衛しか見当たらない。飯高が保証人になれば、お金の調達は容易だったと考えられる。その証拠を地元の有志に探してもらっているのだが、なかなか見当たらないのが残念である。

＊

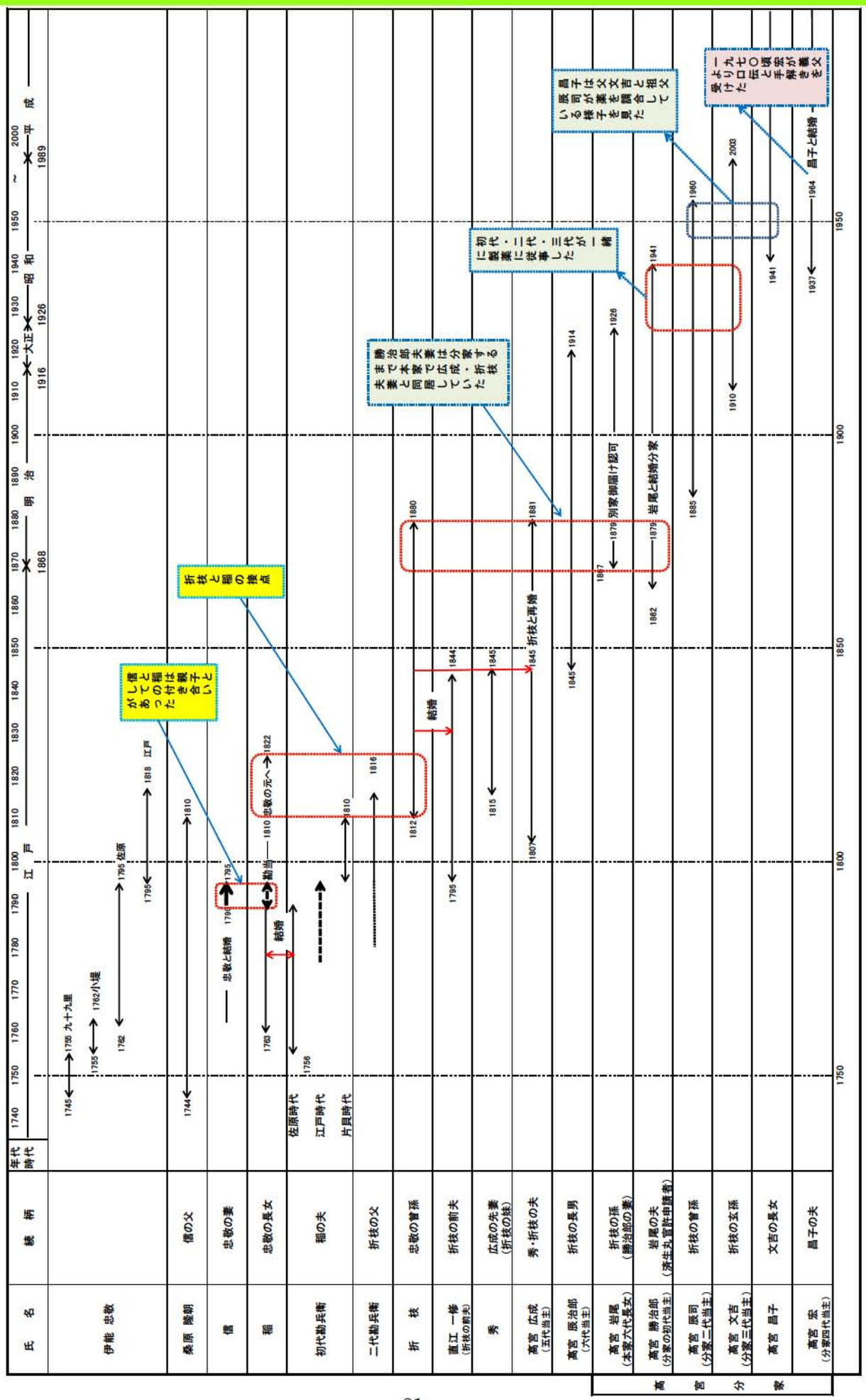
ついでだが、忠敬は若いお信を正妻に迎えたので、桑原は岳父ということになるが、年齢は一歳しか違わなかった。お信はお稲の義母に当たるが、年齢はほぼ同じくらいだったろう。



桑原家と工藤平助の関係

伊能忠敬と高宮家との関係年譜

2014/5/11



伊能忠敬が行かなかった日本

小笠原諸島はなぜ列強に侵略されなかったのか

鈴川　準二

小笠原諸島には大昔から日本人が住んでいたと思っている人が多い。しかし実は無人島の時代が長く続き、島民が住み着いたのはわずか一八〇年前にすぎない。しかも最初の住民は日本人ではなかった。当時の日本は徳川幕府の鎖国政策の下にあり、八丈島より南の無人島には興味はなかった。

絶海の孤島ともいうべき小笠原諸島に注目したのは、徳川幕府ではなく欧米諸国であった。その理由は、捕鯨船の基地に最適だったからである。当時の必需資源であった鯨油を求めて、各国は世界中の海で捕鯨を展開していた。とくに小笠原諸島の近海は鯨が豊富な海域として古くから知られており、台風時の避難や船体修理のために立寄った捕鯨船は多かった。もしこの島に人が住んでいて、水や食料、燃料を補給できれば、捕鯨船にとっては便利で安心である。さらに言うなら、住んでいるのが捕鯨船と同じ国の住民で、さらに統治権が自国にあれば、これ以上のことはない。欧米列強による領土拡張競争の時代である。近くに他国の領土がない絶海の孤島であればなおさら、そこを領土としたいと願うのは当然であった。

なかでも熱心だったのはイギリスとロシアとアメリカであった。この三カ国は、広大な太平洋の要所に軍艦や調査船を派遣したり、無人島に発見者名と国名を書いた札を立てたり、入植者を送り込んだりして、領土獲得のせめぎあいは熱を帯びていった。それが一つのピークに達したのが一八五三年である。

この年の六月十四日にアメリカ海軍のペリー提督が小笠原に来航した。そして七月二十六日にはロシアのプチャーチン提督が来航している。両国とも日本に開国を迫るため、国家元首の書状を携えて来日したことは歴史の教科書にあるとおりだが、目的地である日本の本土に上陸する前に、奇しくもほとんど同時に小笠原に立寄ったのである。まだ日本領と認められていなかった小笠原諸島に、わずか一か月の差とはいえアメリカが先着したのだから、これでアメリカが領有を宣言してもいいようなものだが、事実はそうならなかった。なぜこの好機を活かさなかったのだろうか。

アメリカの目的は領土の獲得よりも、日本と和親条約を結んで自国に有利な開国を日本に迫ることにあった。対外交渉は長崎でのみ行う、という徳川幕府の要請を無視して武力をちらつかせて浦賀に向かったほど強引ではあったが、国内に南北戦争を抱えていたアメリカにとっては、ちっぽけな小笠原を領土とするために列強各国との厳しい交渉を行う余裕はなかった。

ロシアは領土拡張の意欲が強く、早くも一八二八年に軍艦を派遣して調査していたが、小笠原では先住島民から、既にイギリスが領有宣言したと聞かされている。相手が世界最強のイギリスとなると交渉は難航が予想された。トルコとの長年にわたる戦争に国力を集中していたロシアとしては、小笠原問題の優先順位は後回しとならざるを得なかった。

イギリスは小笠原との係わりが最も深く、調査・研究も進んでいた。現地に最初に標識を立てたのもイギリス人だし、各国人混成による最初の定住者たちが一八三〇年に入植したのもイギリス領事の支援によるものであった。しかし定住者の中で誰もが認めるリーダーとなったのはアメリカ人のセボリーであったし、人数が多いのはハワイ人という事実を、イギリスとしても無視できなかった。

こうしてみると、アメリカ・ロシア・イギリスの三カ国が遠慮しあって、三すくみの形になっている。その背景にあるのは、ドイツの東洋学者クラプロートが「アジア誌」の中でムニンシマ（無人島）として小笠原諸島を紹介していたことである。その根拠は、一七八五年に林子平が著した「三国通覧図説」の中で、小笠原諸島の地図とともに「一五九三年に小笠原貞頼によって発見された」と書いていることにあった。これを紹介したクラプロートの著作により、「小笠原は日本領」という暗黙の了解が欧米各国に広まっていたらしい。

しかし事実は小説より奇なり。「小笠原貞頼によって発見された」と言い出したのは、小笠原貞頼の子孫と称する小笠原貞任で、証拠文書を添えて「小笠原諸島は自分のものだから開拓を認めていただきたい」と徳川幕府に願い出たのが発端であった。幕府が調べてみると文書はとんでもない偽造で、小笠原貞任は詐欺の罪で罰せられて一件落着した。一七三五年のことである。

林子平がこの顛末を知らなかったはずはない。したがって「一五九三年に小笠原貞頼によって発見された」という部分は間違いというべきだが、「小笠原という無人島があって、発見したのは日本人」という事実を世界に発信した功績は大きい。鵜の目・鷹の目で太平洋の島々を狙っていた列強の三すくみを引き出して日本の領土を守ったのも、

林子平の「三国通覧図説」の存在が抑止力となったからである。三すくみのアメリカ・ロシア・イギリスのうち最有力の立場にあったイギリスが、小笠原の地理と歴史を十分に調査し、その結果として偽造文書事件に足許をすくわれたというのは、歴史の皮肉という他ない。

史実としての最初の上陸者は、一六七〇年に紀州から江戸に向かっていたミカン船が漂着した時らしい。しかし、「一五九三年に松本城主の小笠原貞頼によって発見された」という説のほうが「ミカン船説」より年代も古く、城主という重みがあるせいか、現地では好まれているようだ。今でも小笠原貞頼を祀る神社のお祭りが続いている。

北方領土、竹島、尖閣諸島などで明らかなように、領有権問題は国家として最も基本的な主張であり、ひとたび実効支配を放棄すると領有権の回復は容易ではない。小笠原諸島の領有権は偽造文書の「けがの巧妙」と、列強の三すくみのおかげですんなりと国際的に認知されたが、せっかくの幸運の後で二度も、日本人の定住という実効支配事実を自ら放棄しているのである。一回目は幕府崩壊の危機に際して遠隔地の経営にまで手が回らなくなった時、二回目は太平洋戦争で小笠原諸島を軍事要塞とした時、定住していた日本人を全員離島させたのであった。しかし二回とも、平和的に領有権を回復できたのは、熾烈な国際力学の中では奇跡と言うほかない。

現在でも領土問題を解決するのは、住民投票でも国連決議でも歴史上の経緯でもなく、軍事的な手段しかない、というのが残念ながら世界の常識である。平和的解決など夢物語だ、と思ってしまいがちだが、小笠原諸島の例もあることを忘れてはならない。そして平和な時であっても実効支配の事実を積み重ねることこそ、将来の国際紛争の予防になることを、学ぶべきである。小笠原で三回起こった奇跡は、四回は起こらない。

「伊能図大全刊行の大成功、御礼」

イノペディア有志

フロア展のイメージを後世に伝えるために、データ化、書籍化について、数年検討してきましたが、昨年、出版社と協議が整い、六月以降「急速前進。急げ！」となり、大車輪で作業を始め、「伊能図大全　全七冊」の企画編集作業を引き受け、十二月には刊行することができました。

散々、シミュレーションをおこない、秋口に予約特価税込十万円と設定してから、中央紙各社に記事協力をお願いし、河出書房は広告費をつぎ込み、会員の皆様には特価約八万円として、会誌でも周知をお願いしました。

お蔭様で、会員各位からは、お友達紹介分を含め、四〇部というとんでもない部数の御注文をいただきました。ありがたく、厚く御礼申し上げます。

一般向け販売も、どうやって千部を販売しようかと迷っていたのが、印刷着手前に二二〇〇部の予約注文を受け、初版二五〇〇部と決定したのは予想 外の幸せでした。伊能忠敬人気は健在です。

出版界では、ちょっとした話題になっているらしく、〇〇大全という名前の書籍広告が最近多いようです。洛陽の紙価を高めるところまではいきませ んが、IT文化全盛の現代に、伊能図を通じて、ささやかな一石を投じたと思っています。(W)

完全復元伊能図フロア展

２０１４年度のフロア展の予定がきまりました。８月28日(木)～31日(日)の間、中央区立総合スポーツセンターで催行(通算27回目)されます。また、来年２月に唐津市で催行する予定で準備が進んでいます。なお、フロア展は本年度末をもって終了の見込みです。

フロア展会場の中央区立総合スポーツセンター（上）と会場案内図（左）

伊能測量漫筆　四

桑原隆朝は伊能測量の影のキーマン

渡辺　一郎

今号で桑原隆朝と高宮家に関係する伝承が紹介されているが、隆朝が忠敬の第一次測量にあたる蝦夷地測量に協力した模様は「新説伊能測量物語」でも述べたとおりである。しかし本号で紹介するように、第二次の本州東海岸測量への展開に当たっても桑原隆朝は大活躍だった。

仙台藩の江戸詰上級藩医で四百石。名医で藩侯一族も診察する一方、藩邸外の町屋に住み、諸藩、旗本、大町人など一般人の治療も認められていた。各界の名士と医者として交流していたから情報通でもあったろう。医者と坊主は音読みというから、名前は、りゅうちょうというのが正しい。

仙台藩主伊達宗村の八男に生まれ、堅田堀田家（佐倉藩の分家）に養子に入り藩主となった若年寄・堀田摂津守と親しく、幕府のトップシークレットにも接しうる立場にあった。

忠敬とウマがあって、娘のお信を忠敬の後妻に入れ、天文方高橋と引き合わせるなど、ひとかたならぬ協力をしている。隆朝のことは、故伊能陽子、安藤由紀子両氏の調査で、かなりの部分が明らかになったが、どういうキッカケで忠敬が隆朝と知り合い、なぜ、娘のお信を3人目の妻に迎えることになったかについては、全く資料が無くて分からない。

これだけ密接な関係があるのだから、桑原からの手紙や関係資料が伊能家に無かった筈はないので、故伊能陽子さん・安藤由紀子のお二人が徹底的に伊能家文書、記念館文書を調べてくれたが一通も出てきていない。

私を加え、三人の意見では、考え難い話だが、伊能家累代や一門のなかで誰かが、伊能測量の功績を伊能一人に集中するために、桑原関係の資料を捨ててしまったのではないかと考えている。といっても実行の可能性がある人物は、伊能節軒さん（伊能茂左衛門家）と伊能景文さん（伊能家四代目）位しか思い至らないが、断簡涙墨でもキチンと保存されてきた伊能家については、誠に理解しがたいことである。

現在では膨大な地元の応援の実態や、幕命を受けた諸藩の協力模様が赤裸々に分かっており、キッカケは忠敬であったとしても、伊能測量は国家事業だったことは明白で、伊能一人の功業などとは誰も考えない。

しかし、幕末の混乱期を前に、シーボルト事件もからんで、伊能家と伊能測量チームが絶えてしまったなかで、親戚一統の努力で健在だった伊能家の地図と史料群を護り、伊能家再興に努めた関係者にとっては、忠敬を盛り立てるのは大事なテーマだったのだろう。

＊

話題を変える。妻のお信の父だから、隆朝は忠敬の岳父ということになるが、生没年は一八四四―一八一〇年で、年齢は忠敬と一歳しか違わない。お信を貰ったとき、忠敬四五歳、隠居してもいい年頃だった。実際に結婚後、領主の津田山城守に隠居願いを出して断られている。

恐らくお信は二〇代半ば、出戻りだったというが、二〇歳違う夫婦は珍しい。最初の妻ミチは四歳年上の二一歳だったが、お信は二〇歳若い二〇歳台。その次に一緒に暮らしたお栄も二〇代半ばと推定されるし、二人目の内妻法名妙諦も二〇歳台だったと思われる。

測量を始めるまで、いつも二〇歳台の元気な若い女性を妻としていた訳で、全く隅に置けない親父さんということになる。

＊

ところが、お栄は第二次測量から、プッツリと消息が絶え、女っ気が無くなるのである？

測量を始めてからの日課はかなり詳しく史料があり、またスケジュールはタイトで、とても各地の若い女性を愛でる時間は無さそうである。

それでも、時折、逗留という名の滞在形測量があり、賑やか町に設定されており（山のなかの逗留は無い）、時間の余裕も出るから、何かそれらしい記録がないかと思いながら眺めるのだが、見つからない。

歴史家にいわせると、そういう接待記録は絶対に出ないものだという。一件だけ、屋久島測量の地元記録のなかに、測量に貢献して賞詞を貰った庄屋が、一方で、測量隊の接待に娘を出せと云われて断り、藩から「国家大賓を迎えるにあたって不敬である」と処罰されている例がある。

これなど、普通の飲食の接待係なら断る理由はないから、特別接待だった可能性は高いが、この記事だけでは匂いがするだけである。地元史料を伊藤栄子さんに随分読んでもらったが、怪しいのはこの一件しかみつからなかった。

隆朝・お信からとんだ処に脱線したが、妄言多謝。次は伊能測量開始時の老中首座で三州吉田藩主松平信明について調べてみたいと思っている。

伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて
―各地の記念碑・標柱等紹介（二）―

昨秋より、全国の市町村（『伊能忠敬測量日記』中の宿泊地）に、伊能忠敬関係の記念碑・案内板・標柱・史料・文献・宿所情報などを問う調査書を送り、多大なるご協力をいただいてきました。厚くお礼を申し上げます。

記念誌には、すべての記念碑・案内板・標柱等を一覧表にして掲載する予定ですが、写真は一部掲載になります。そこで、前号から会報で随時紹介することにしました。もし、旅行や仕事で現地にお出掛けの節は、伊能忠敬測量隊の足跡に思いを馳せるとともに、それを顕彰し郷土の歴史として学びの中に取り入れている地元の方々、小・中学生の皆さんの存在にも思いを寄せていただければ、このシリーズ担当者としては嬉しい限りです。

一、北海道稚内市

北海道での伊能測量隊の足跡は、前号で紹介した松前郡福島町の「伊能忠敬蝦夷地上陸の地」から野付郡別海町の「伊能忠敬測量隊到達最東端の地」までの沿岸です。しかし、ご存じのように、伊能図の完成に欠くことのできない人物がいました。間宮林蔵（一七八〇‐一八四四　常陸国筑波郡　現在の茨城県つくばみらい市出身）です。稚内市に間宮林蔵の記念碑があるということを知り、調査を依頼しました。

（1）間宮林蔵の立像

①名称　「間宮林蔵の立像」

②碑文　「間宮林蔵　一八〇八年　南西のそよ風にのって櫂と帆の小舟で　この地から樺太に渡り苦難の踏査のすえ歴史にその名をとどめる間宮海峡発見の大偉業を成し遂げた。林蔵二十九才のときである。その偉大なる業績をたたえ林蔵生誕二百年にあたり　意義ある出航の日をえらび　ここに記念碑を建立する。
一九八〇年七月十三日
稚内市長　浜森辰雄書
峰孝作　」

③設置場所　稚内市宗谷岬

④設置年月日　昭和五十五年七月十三日

⑤設置者　稚内市

⑥見学の可否　随時可能（ただし、降雪期は積雪のため見学が難しい場合あり）

（2）間宮林蔵の胸像

①名称　「間宮林蔵の胸像」

②碑文　「間宮林蔵先生は安永九年常陸国筑波郡平柳に生まれた。文化五年二十九才蝦夷奉行に推され北方開発と国防の急務より樺太探検を命ぜられた。先生勇躍二回にわたり遠征踏査し苦難をおかし文化六年ついに海峡を発見、世界の疑問を解決する勲功をたてた。外人はこれを間宮海峡と命名した。
渡樺二回の地ここ宗谷に記念碑を建てその熱烈な祖国愛と不滅の偉業を讃える
昭和三十三年八月
稚内市長　西岡斌書　」

③設置場所　稚内市宗谷村字宗谷　宗谷歴史公園内

④設置年月日　昭和三十三年八月

⑤設置者　稚内市

⑥見学の可否　随時可能（ただし、降雪期は積雪のため見学が難しい場合あり）

（3）間宮林蔵渡樺出港の地の碑

①名称　「間宮林蔵渡樺出港の地の碑」

②碑文　「此地は吾祖先の樺太と　逓送を行える地なり　間宮林蔵渡樺を記念し　石標を建て部落のすべてが毎年の祭を行えり　此石は当時をしのぶ唯一のもの也

宗谷アイヌ　柏木ベン　」

③設置場所　稚内市宗谷第二清浜地区

④設置年月日　昭和三十三年七月十一日

⑤設置者　稚内市清浜地区の有志

⑥見学の可否　随時可能（ただし、降雪期は積雪のため見学が難しい場合あり）

（稚内市教育委員会教育総務課提供）

※「稚内市北方記念館」に「柏木ベン」という女性の写真が展示されています。その説明文には、「ソウヤ(現在の稚内市宗谷)を中心に居住していたアイヌの人びとを宗谷アイヌといいます。十九世紀はじめには四〇〇人規模の人びとが住んでいました。北海道アイヌの文化と樺太アイヌの文化の接点をなす重要な場所に位置しているにもかかわらず、その文化的実態はよくわかっていません。一九六一年(昭和三十六年)の柏木ベンさんの逝去により宗谷アイヌの文化の伝承者は絶えました」とあります。

二、北海道室蘭市

①名称　「伊能橋」

②説明文　「その昔、伊能忠敬がここを渡ったので命名されたといわれている。五十歳をすぎてから日本全国を測量して歩いた伊能忠敬は蝦夷地の測量のため簡単な測量機械を持って助手など五人と共に江戸を出発した。寛政十二年（一八〇〇）六月、室蘭に到着し、陸地の測量を行いながら東へ向かうこととなり、このとき小学校の沢道を通り、現神社下の道を八丁平へ向うため、本輪西川を渡ったとされている。　室蘭市」

③設置場所　室蘭市本輪西町三丁目　本輪西中央通線（本輪西川に架かる橋）

④設置年月日　昭和三十七年

⑤設置者　室蘭市

⑥見学の可否　随時可能だが交通注意

案内板「伊能橋」

「伊能橋」のプレート

本輪西通線
（右端に伊能橋と案内板）

※「伊能橋」の由来については、地元研究者の井口利夫氏（本会会員）により疑義が出されているそうです。氏は『茂呂瀾』三十八号（室蘭地方史研究会　平成十六年二月）に、当時の測量ルートの検証から、伊能忠敬が測量時に渡ったという名称の由来が誤りであることを明らかにし、現在市道上にある伊能橋が、以前は「旧道」に設置されていたことや、「伊能橋」という名称も昭和五十年代以前には異なるものであった可能性を指摘しています。

（室蘭市教育委員会生涯学習課提供）

三、青森県東津軽郡今別町

①名称　標柱「史跡 伊能忠敬 止宿」
②説明文　「・一回　寛政十二年（一八〇〇）五月十日　中食　・二回　同年九月二十日中食　・三回　享和元年（一八〇一）十一月二日　止宿　・四回　同二年（一八〇二）八月十四日　止宿　小倉屋四郎兵衛」
③設置場所　青森県東津軽郡今別町大字袰月字袰村元四十八番地1（袰月稲荷神社前）
④設置年月日　平成六年十月五日
⑤設置者　小倉正廣
⑥設置の背景・経緯　不明
⑦見学の可否　随時可能
※小倉正廣氏（死亡）は明治四十一年十一月二十三日生まれ。標柱設置時は八十六歳。おそらく、伊能測量隊が宿泊した小倉屋四郎兵衛の子孫であって、自宅敷地内に私費で建てたものと思われます。説明文中の赤字部分は、『伊能忠敬測量日記』により、河崎が訂正した箇所です。
※会報で連載中の「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」では「母衣月村」となっていますが、正しくは「袰月」でした。原文『伊能忠敬測量日記』で確認すると、おそらく忠敬は「袰月」と記載しているように見えます。「袰」の一字が大きいので「母」と「衣」の二字にも見えます。

（今別町教育委員会教育課提供）

四、群馬県高崎市

高崎市内には伊能忠敬関係の記念碑・史料等は「無し」とのことですが、忠敬は興味深い記述を残しています。「伊能忠敬測量日記」文化十一年五月十一日の項に、

「多胡前ニ打止。・・・多胡之碑文　弁官符上野國片罡郡緑野郡甘良郡并三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅宣左中弁正五位下多治比真人大政官二品穂積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊」

と、碑文全文（青字）を書き写しています。（実際の碑文は、「太政官」、「左太臣」、「右太臣」です。）伊能大図にも「多胡碑」まで測線が延びていて、同じ道を折り返していますから、「多胡碑」が目的だったことが分かります。江戸時代には存在が知られていて、忠敬とほぼ同年代の高山彦九郎や書家が訪れたそうです。現地周辺は吉井いしぶみの里公園として整備され、「多胡碑記念館」があります。

多胡碑記念館（高崎市吉井町池一〇八五）

「国特別史跡多胡碑（七一一年）は、那須国造碑（七〇〇年　栃木県）、多賀城碑（七六二年　宮城県）と並ぶ日本三古碑の一つです。また、山上碑（六八一年）、金井沢碑（七二六年）と並んで上野三碑の一つでもあります。奈良時代初期の和銅四（七一一）年に多胡郡が誕生したことを記す記念碑で、当時の三つの郡から三百戸を分割し、新しく多胡郡を設けたことが記されています。」

「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in 金沢工業大学」にて

多胡碑覆堂

覆堂の中の多胡碑

（写真・解説ともに多胡碑記念館提供）

あとがき

前号以降の調査では、千葉県銚子市教育委員会生涯学習課からも回答をいただきました。詳細は、前号の宮内敏氏報告をご覧ください。

今回は、伊能図の完成に貢献した間宮林蔵の顕彰碑や像を紹介しました。ただ、どの碑文も「樺太発見」の事蹟の顕彰であり、伊能忠敬との関係に触れたものはありませんでした。設置時期はいずれも三十～五十数年前であり、忠敬没後二百年記念誌には蝦夷地測量・絵図作製における間宮林蔵の果たした役割・功績が明確に示されることが望まれます。

また、多胡碑測量は各地の寺社測量と同様に「伊能測量の不思議」の一つです。忠敬個人の関心事だとすると、地図上に載せることはしないだろうと思うのですが。七十二号で星埜由尚氏が「伊能測量隊の測量行程については、当然幕府の意向が反映されたと考えられるが、その際、大名の城下・陣屋、御朱印を受けている寺院・神社などの情報については当然重視されたであろう」と述べています。それでは多胡碑のような史跡は、やはり幕府公認の測量だったのでしょうか。このような「不思議」も明らかにしてもらいたいと願っています。

まずは、ゆかりの地に「伊能忠敬、多胡碑を測量する」といった掲示や案内板が設置されることを期待します。『伊能忠敬測量日記』と伊能大図で、伊能測量隊が各地に残した足跡をたどることは、その地の歴史の意外な一ページを掘り起こすことだと実感する日々です。

（没後二百年記念誌編集担当　河崎倫代）

山武歳時記（六）
―夏場が旬の「九十九里地はまぐり」

江口俊子

山武市に住む我が家に、週一回、九十九里町片貝から魚屋がミニバンで回って来ます。

鰯、鰺が中心ですが、初夏には蛤を持って来ます。

私は新玉葱をたっぷりのせた蛤の酒蒸しを頂く時、贅沢な気分になり、つくづく、今、千葉県に住んで良かったと思います。

魚屋さんから蛤漁には、船掻きと、手掻きが有り、今年は五月一日が手掻きの解禁日だと教えてもらいました。

平成二十六年五月四日、スケッチするため千葉県山武郡九十九里町片貝　片貝海水浴場に行きました。

片貝海岸は伊能忠敬の出生地小関からは五キロの道程です。

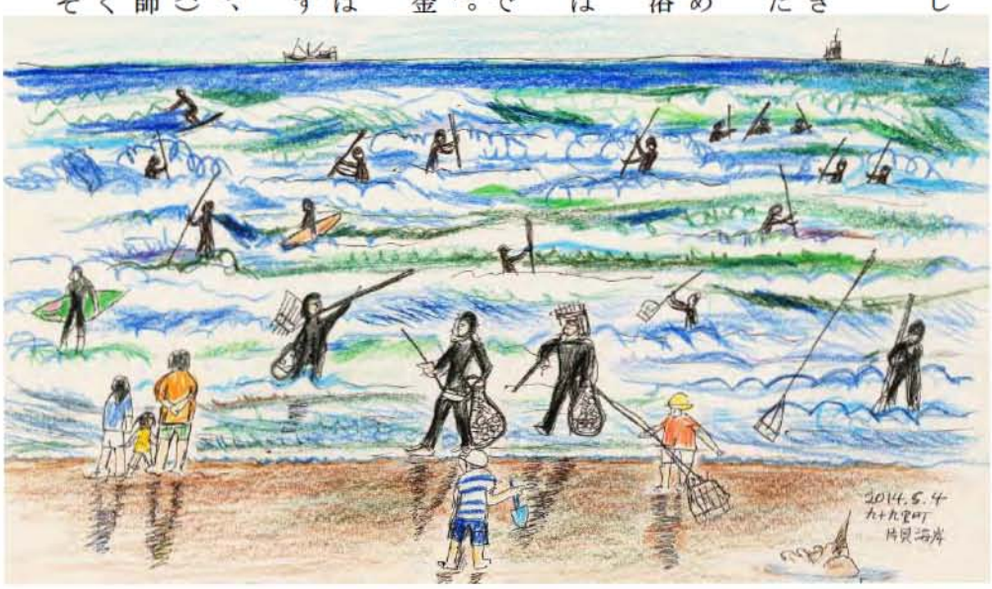
浜に着いて海を見渡すと、波間から肩まで浸かって、長い棒を動かす人達がいました。長い棒は腰カッターと言い、大きな熊手に金属の籠を付けた様な漁具です。

大きな波をかぶりながらの蛤の手掻きは危険がいっぱいで、波に呑まれ、命を落とす漁師もいると聞きました。

この日は午前十一時頃から潮が引き始め、昼近くになると、スカリ（蛤を入れる漁具）を持ったウェットスーツを着た精悍な漁師達が浜に上がって来ました。漁師に話を聞くと、一時間半の手掻きで、四十キロ獲ったそうです。

スカリの中の蛤は大きな蛤は少なく、三センチ以上の「ぜんな」と当地で呼ばれている蛤がほとんどでした。

浜に上がった漁師達は四～六名位いがグループで、直ぐさま水産物を扱う店に向かいます。



砂浜が広く遠浅の海の九十九里町片貝海水浴場
長い棒の付いた腰カッターを動かす蛤の手掻き

蛤について詳しいことを知るために、九十九里漁業協同組合を訪ねました。

現在手掻きの組合員は南は長生郡長生村から、北は山武郡横芝光町までです。蛤漁の許可証は四百名余りに出されています。

九十九里海岸の蛤は本蛤です。

一般に蛤の美味しいのは春ですが、九十九里海岸の旬は夏です。夏場の蛤は身が厚く、プリプリとして、食感が良く、甘みが増して、旨みが凝縮しているからです。

当地の蛤が特に美味しいのは、九十九里海岸の南方から北上する黒潮暖流と、北海から南下する

３～４年で育った５センチ以上の蛤を「九十九里地はまぐり」としてブランド化

親潮寒流が、房総半島の東方沖で接する所に、エサとなるプランクトンが大量に発生するからです。

この蛤は五センチ以上のものを「九十九里地はまぐり」としてブランド化しています。

そして、今、絶滅危惧種として認定されています。そのため毎年本蛤の稚貝を放流しています。

３センチ以上の蛤を当地では「ぜんな」と言う
２～３年の成長期なので美味

さて、九十九里海岸では、いつ頃から蛤漁が行なわれていたのでしょうか。地元「九十九里町誌」で調べてみました。町誌には

飯高家文書一七七五年（安永四）末正月の『村誌入用帳』に

「　三月三日

一百四文　四ッさし

六串ッ　蛤さし連十連平山様へ節供進物

北弥兵衛に渡す　」

とあり、このはまぐりがどのようにして獲られたものか判らないが、はまぐり剥き身を竹串に刺し、それを縄で連にして乾したものが贈答用として珍重されていたことが判ります。

この飯高家文書が書かれた三十年前、伊能忠敬は九十九里町小関で出生しています。少年期、もしかしましたら、片貝海岸の渚で足踏して。蛤を採っていたかもしれませんね。

九十九里海岸の夏の風物詩ー浜昼顔　群生地が年々減少している

岐阜県下呂市で「伊能忠敬測量調査下呂来訪２００年展」開催！

本誌71号掲載記事がご縁で、地元有志による実行委員会が結成され、６月13～22日までの10日間、「下呂来訪２００年展」が開催されました。短期間の準備にも関わらず、高山市郷土館館長による講演「伊能忠敬と下呂温泉」、子ども向けイベント「現代と伊能時代の測量の違い」なども企画され盛況でした。開催場所となった旧岐阜銀行は伊能忠敬が宿泊し夜間天文測量をおこなった庄屋飛騨屋久兵衛家跡地です。なお、詳細は次号で報告していただきますので、ご期待ください。

伊能忠敬測量調査下呂来訪 200 年展

マルタ島見聞記

I・W 生

家内のお供で、マルタ島に個人旅行でいってきました。聖ヨハネ騎士団、通称マルタ騎士団の根拠地として若干の興味があったので、マルタに4泊しました。地中海中央の孤島ですが独立国で、EUに加盟し通貨はユーロです。人口41万人。日本人ガイドがつき、タクシーを2日間借切りましたので、効率よく廻り、色々な話がきけました。

マルタ島の位置

大したことは無いと思っていましたが、首都のバレッタには不相応に立派な金張りの大聖堂があって驚きました。カトリックですから、荘厳とか、奇跡は、得意な筈ですが、この孤島に、こんな立派な教会がとビックリしました。

写真1

写真2

ガイドさんはヨーロッパの多くの信者が、マルタ騎士団が自分たちを守ってくれていると思って、献金をしていたと説明しました。

騎士団長の館の内部です。王侯の住まいのようですが、実際にトルコとの戦争で一回は勝利しましたが、その後は何もせず、腐敗していたとのことです。（写真3）

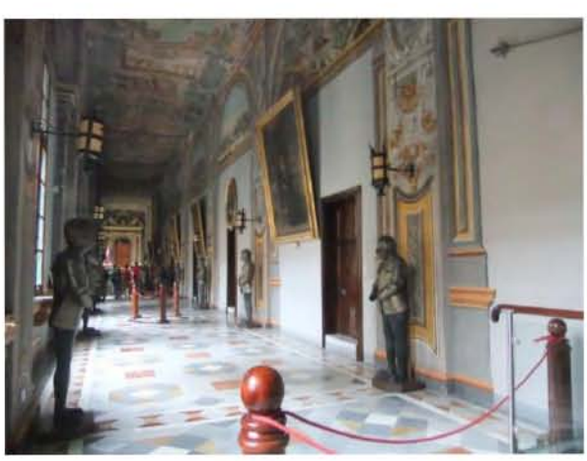


写真3

市街は（写真4）のようで、観光客でにぎわっています。住居は狭い道を挟んでビッシリと建て込んでいます。（写真5）物は安くて生活費は日本の半分で済むそうですが、石造の特徴で蓄積が進んで今のような形になったのでしょう。日本の最近の住宅はとても資産といえない建物ばかりで、電気器具同様な耐久消費財的住まいばかりつくられるのは残念です。

写真４

写真５

50年経っても劣化せず、100年の使用に耐えるよう住宅は考えるべきだと思うのですが、いかがですか。欧州の古い町並みをみていつも考えます。10年経つと建物の価値はゼロなどという今のシステムは基本が間違っています。30年経って流通できない建物には融資しない、と決めればいいのではとおもいますがいかがですか。

カトリック大聖堂の向かい側の２階レストランで食事をしました。（写真４）赤い部分の出窓のなかのテーブルでした。蛸の煮付けという珍しいおかずがメインでした。

写真６

写真７

景色としての市街地は（写真６）とおりで、展望台からの眺めです。湾の反対に廻りこむと（写真７）のような眺めで、ヨーロッパの街々と変わりません。

写真８

写真９

最後に訪れたのは、第一次世界大戦のとき日英同盟によって地中海のドイツ潜水艦の跳梁から地中海を通行する商船を守るため、地中海に派遣された日本海軍の特務艦隊の戦死者の墓碑です。戦没者墓地の中にあります。地中海へ駆逐艦の派遣は承知していましたが、司令部がマルタ島に置かれたとは知りませんでした。（写真8．9）

確かに地中海の中央にあって交通の要地だったのでしょう。墓碑の横には艦長以下の戦死者59名の氏名が記されています。最近、集団的自衛権などというわけのわからない言葉が飛び交っていますが、ハッキリいえば、日米軍事同盟を結ぶかどうか、という話です。ハッキリ言わない今の論議はまったく人を馬鹿にした話ですが、同盟とは必要が起これば、はるか地中海までも軍を出すということです。

ガイドはブアッサーロ佳子さんといい、NHKのマルタ紹介TVの監修をしたという優秀な方でした。マルタ在住の日本人は31人、ただし男は1人、30人は女ということに驚きました。ガイドをしている人は5人、その他事務とか観光業関連が多いそうです。

個人で旅行していると、よく日本語で話しかけられますが、海外にしっかり根を生やしている方は女性のほうが多いようです。

ライデン大学の日本語科の教員数名の奥さんは全部日本人といわれたし、スエーデンで20数年住んでいるという方に話しかけられたこともあります。ライデンの国立博の日本語の達者な学芸員のホスさんのお母さんは日本人と聞きました。

男の子二人の写真を首から提げていましたが、息子さんとのこと。男の子は大変でしょう、と聞いたら、「男の子の方が母親に優しいと聞いているので、頑張っているの」とのことでした。国籍はと聞くと両親が健在なので、悲しませないよう、日本国籍を持っているそうです。日本の法律では、外国人と正式に結婚すると日本国籍を失うことになっています。したがって、現在は事実婚ということになります。

英語のガイドも出来るでしょうと聞くと、個人旅行が増えてきて、日本語ガイドの仕事があるので、ほかの人の仕事を奪わないよう、英語の仕事はしないという。子供とは日本語で話す。こどもは外では英語、マルタ語、イタリア語で暮らしている。物価は安いので生活は楽だとのこと。どうやらリタイヤ族の楽園らしい。

この国の欠点は水がないことで、日本の技術援助で海水の浄化装置を6ヶ所設置し、水道のすべてを海水濾過により給水しているという。

ちなみに、旅行社にあとで、ガイド料を聞いたら、空港へ送迎（英語ドライバー）、日本語通訳2日間、タクシー2日間で4万4千円とのことで大変安かった。これでは彼女には2日間2万2千円やっとでしょう。そのなかからドライバーに1日10ユーロのチップを渡していたから、私も10ユーロドライバーに渡し、また最後に佳子さんに40ユーロを渡した。

もう少し、あげればよかったかとも思うが、渡したときの彼女の姿勢から丁度よかったと思っている。家内は40でも多すぎるという。この辺の感触は、観光業はチップで成り立つという理解は、日本人にはわかり難い。

最初に空港から深夜、ホテルについたとき、チップが要るなと思ったが、まったく見当がつかない。少なかったり、多すぎて馬鹿にされるのも残念なので、料金に含まれているのだから、と見送ったら変な顔をされた。後から、入国ゲートで渡された案内を見ると5～7ユーロ渡してもらえると有難いとあったから、これは失敗だった。

航空券は、成田～ロンドン、ロンドン～マルタで買ったのだが、発券が個別だったため、荷物を通しで輸送してもらえなかった。旅行会社は事前に何もいわず、成田のチェックインで、バージン航空に言われてガッカリした。英国で一度入国して荷物を受け取り、すぐ乗り継ぎのため出国しなければならない。

渋滞で有名なロンドンの入国審査に1時間かかり、出国で厳しいセキュリテイ検査に合い、手荷物を全部ひっくりかえして調べられる始末となってしまった。これも大失敗だった。

団体旅行の自由度のないのは気にいらないが、個人旅行は自己責任ですべて処理せねばならず、何らかのトラブルが起こることが多い。しかし、50回を遥かに超えた海外旅行も今回で打ち止めとし、国内にも行ってないところが沢山あるから、これから国内を廻ろうと話合っている。

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修　渡辺一郎　　編著　井上辰男

【第六次測量】（四国沿岸・大和路の一）　自　文化五年一月二五日　至　文化五年五月十日

【表中赤色文字は改訂増補分】

【本隊】

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
五月一一日	（4）	浦之内村出見	同　須崎市	本陣真言宗 春日山千光寺　清助		百五十九
一二	（5）	奥浦東分村	同　須崎市	本陣百姓直蔵 忠治右衛門		百五十九
一三	（6）	井尻浦	同　須崎市	百姓喜惣平		百五十九
		須崎浦	同　須崎市	大庄屋川州嘉右衛門 富岡屋弥惣右衛門		百六十
十四	（7）	野見浦枝久通浦	同　須崎市	百姓弥三郎		百六十
		須崎浦	同　須崎市	大庄屋川州嘉右衛門 富岡屋弥惣右衛門	須崎浦逗留測	百六十
十五	（8）	野見浦	同　須崎市	本陣竹野屋亀之丞 庄屋代森三平		百六十
		野見浦枝久通浦	同　須崎市	百姓弥三郎	久通浦逗留測	百六十
十六	（9）	須崎浦	高知県須崎市	大庄屋川州嘉右衛門 富岡屋弥惣右衛門		百六十
十七	（10）	同	同	同	同所逗留地図	
十八	（11）	久礼浦	同　中土佐町	庄屋治三郎 百姓義三右衛門		百六十
十九	（12）	同	同	同	同所逗留測。坂部、下河辺は地図に残し、秀蔵は病気。	百六十
二十	（13）	上加江浦	同　中土佐町	本陣庄屋大谷良助 若松屋幸吉	坂部、下河辺地図、秀蔵病気 三人共先行。	百六十
二一	（14）	志和浦	同　四万十町	本陣 臨済宗瑠璃山楽師寺		百六十
二二	（15）	興津浦	同　四万十町	庄屋渡辺俊蔵		百六十
二三	（16）	鈴浦	同　黒潮町	庄屋林左衛門 庄屋清助		百六十
二四	（17）	同	同	同	雨天逗留	
二五	（18）	佐賀浦	同　黒潮町	本陣大庄屋森佐十郎　庄屋克治	恒星測定	百六十
二六	中食	伊田浦	同　黒潮町	松山寺	此寺伝来の紀貫之の月ノ字の額一覧す。	百六十
	（19）	上川口浦	同　黒潮町	本陣石見屋多三郎 糀屋治七		百六十

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
二七	(20)	田野浦	黒潮町	本陣 真言宗蓬来山和泉寺 庄屋彦之進	坂部、下河辺、青木三人直に田野浦に至て地図を成。	百六十
二八	(21)	同	同	同	雨天逗留	百六十
二九	(22)	下田浦	同 四万十市	本陣平田屋忠蔵 庄屋麻田瀬左衛門	四万十川、幅二三町	百六十一
三〇	(23)	下茅浦	同 土佐清水市	本陣大庄屋岡村益平 飴屋嘉兵衛	恒星測定	百六十一
文化五年六月 一	(1808) (6.24)	窪津浦	高知県土佐清水市	本陣真言宗海蔵院 百姓仁兵衛	恒星測定(南北の差大、十四五分となる)	百六十一
二	(25)	伊佐浦足摺山	同 土佐清水市	本陣嘉宝坊 隆蔵坊	足摺山普陀絡院金剛福寺 又磋陀山という。恒星測定	百六十一
三 中食		松尾浦	同 土佐清水市	本陣庄屋浜田乙治郎 升屋利八		百六十一
三	(26)	清水浦	同 土佐清水市	大黒屋貞右衛門	途中より大風雨。乗船、清水浦〈着	百六十一
四	(27)	同	同	同	同所逗留測。恒星測定	百六十一
五	(28)	三崎浦	同 土佐清水市	庄屋代 中村伝五右衛門 医師泥谷孝達	下川口浦の竜串の浜の景色異石を一覧す。	百六十一
六	(29)	同	同	同	同所逗留測。	百六十一
七	(30)	下川口浦	同 土佐清水市	本陣升屋亀之助 庄屋佐井弥四郎	忠敬、下河辺、稲生三人は、下川口浦〈先行、地図を調、青木乗船海岸を図す。恒星測定	百六十一
八	(7.1)	大津浦	同 土佐清水市	本陣 庄屋代上岡弁之丞 粟津屋直兵衛	暦局より高知届用状届く。	百六十一
八		小才角浦	同 土佐清水市	庄屋川内民之丞		百六十一
九	(2)	西泊浦	同 大月町	本陣新屋伝右衛門 新屋千三郎		百六十一
十	(3)	古満目浦	同 大月町	本陣庄屋儀助 年寄伴五右衛門	稲生病気。恒星測定	百六十一
十一	(4)	柏嶋浦	同 大月町	本陣 真言宗広布山法蓮寺 升田屋又太郎	柴山、稲生病気。恒星測定	百六十一
十二	(5)	同 弘瀬浦	同 宿毛市	本陣中嶋屋善左衛門 久佐屋友之丞	柴山病気に付、柏島浦〈残す 恒星測定	百六十一
		沖島 母嶋浦	同 宿毛市	一向宗徳法寺		百六十一

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
十三	(6)	柏嶋浦	同 大月町	本陣 真言宗広布山法蓮寺 升田屋又太郎		百六十一
十四	(7)	同	同	同	柏嶋浦一周を測。坂部、稲生地図を成。	百六十一
十五	(8)	橘浦	同 大月町	本陣庄屋 脇左衛門 易治郎		百六十一
十六	(9)	同	同	同	同所逗留測。忠敬病気。	百六十一
十七	(10)	小盡浦	同 宿毛市	本陣米屋千蔵 米屋寿平	青木図、忠敬病気、共に止宿(先行。	百六十一
十八	(11)	同盡	同	同	雨天逗留	
十九	(12)	同	同	同	雨天逗留	
二十	(13)	同	同	同	七日島周囲測。恒星測定	百六十一
二一	(14)	大島 大嶋浦	同 宿毛市	本陣 庄屋小野久左衛門 浪人小野善治郎	大嶋半周測。桐島一周、感陽島半周測。大籐嶋一周測	百六十一
二二	(15)	同	同	同	大嶋半周測。市嶋一周測。片嶋一周測。暦局行書状を出す。	
二三	(16)	宿毛村	同 宿毛市	本陣大庄屋 小野久治右衛門 郷士立田幸治郎		百六十一
二四	(17)	藻津村	同 宿毛市	本陣庄屋又三郎 同人隠居	無測量にて一同に乗駕篭止宿に至る。間清市郎(書状出す	百六十一
二五	(18)	外海浦枝深浦	愛媛県愛南町	本陣 外海浦庄屋勝之丞 組頭利左衛門	恒星測定	百六十一
二六	(19)	同	同	同	卯来嶋一周測。下川辺地図に残、文助病気。国主より、御贈被下、帰府伺迄、預け置。	百六十一
二七	先手中食	外海浦枝久良浦	同			百六十一
	後手中食	外海浦枝深浦	同			百六十一
	(20)	同	同	同	同所逗留測。	百六十一
二八	(21)	外海浦枝福浦	同 愛南町	本陣与双新蔵 百姓幸吉		百六十一
二九	(22)	同	同	同	同所逗留測。福浦字鼻面絶壁大岩石、波高船測難相成。稲生地図。	百六十一

文化五年閏六月（1808）

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
一	（7.23）	外海浦枝中泊浦	愛媛県愛南町	本陣喜三兵衛 庄治郎	忠敬は先〈止宿〉至り、北極度を写。恒星測定 鹿嶋一周測。横嶋一周測（五六丁難所に付不測）	百六十一
二	（24）	同	同	同		百六十一
三	（25）	内海浦枝中浦	同 愛南町	本陣組頭久右衛門 武助	恒星測定	百六十一
四	（26）	内海浦枝平山浦	同 愛南町	本陣内海浦庄屋 実藤平左衛門	大嶋一周測。恒星測定	百六十一
五	（27）	同	同	同	同所逗留測。恒星測定	百六十一
六	（28）	内海浦枝家串浦	同 愛南町	本陣曹洞宗泉法寺 組頭徳右衛門	恒星測定	百七十一
七	（29）	内海浦枝魚神山浦	同 愛南町	本陣与双与左衛門 利右衛門	恒星測定	百七十一
八	（30）	下灘浦枝須下浦	同 宇和島市	百姓順蔵	比日より青木病気。恒星測定	百七十一
九	（31）	下灘浦枝鼠鳴浦	同 宇和島市	下灘浦庄屋 赤松宇多之丞 浄土宗浄智寺	竹嶋一周測、同嶋続の高嶋半周測。	百七十一
十	（8.1）	同	同	同	同所逗留測。唐霞にて測 恒星測定	
十一	（2）	北灘鵜ノ浜浦	同 宇和島市	本陣北灘鵜ノ浜浦 庄屋清五郎 済家宗補陀山慈済寺	我等〈領主より御贈被下、帰府伺迄預る。恒星測定	百七十一
十二	（3）	下波浦枝結出浦	同 宇和島市	本陣下波浦 庄屋右平治 則村庄屋籐之丞	恒星測定	百七十一
十三	（4）	蒋淵横浦	同 宇和島市	本陣蒋淵横浦 庄屋安右衛門 浄土宗光照寺	黒嶋、契嶋一周測。恒星測定	百七十一
十四	（5）	同	同	同	同所逗留測。	
十五	（6）	日振嶋明海浦	同 宇和島市	明海浦庄屋 清家六郎左衛門 平十郎	下川辺、青木、稲生、直に明海浦に渡て地図を成。御五神嶋一周測。横嶋半周測。浅草暦局御用状届。恒星測定	百七十一
十六	（7）	同	同	同	竹ケ嶋、沖ノ嶋各、半周測。	
十七	（8）	戸嶋本浦	同 宇和島市	戸嶋本浦 庄屋庄右衛門	遠戸嶋一周測。加嶋一周測。恒星測定	百七十一
十八	（9）	上波浦枝矢野浦	同 宇和島市	庄屋俊治	恒星測定	百七十一
十九	（10）	三浦枝大内浦	同 宇和島市	庄屋九兵衛	恒星測定	百七十一
二十	（11）	九嶋浦枝小浜浦	同 宇和島市	本陣材木屋善蔵 組頭八郎兵衛	恒星測定	百七十一

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
二一	(12)	宇和嶋城下	同　宇和島市	本陣味噌屋庄三郎 米沢屋六右衛門	琵琶ヶ嶋一周測。小高嶋半周測。恒星測定	百七十一
二二	(13)	同	同	同	同所逗留。地図盤を仕立る。領主より、御贈物、即帰府伺迄、預ヶ置。恒星測定	
二三	(14)	同	同	同	同所逗留測。和霊新社へ参拝	百七十一
二四	(15)	同	同	同	郡方下役中一同願に付、地図を成。領主より、贈物被下。帰府伺迄、預ヶ置。	
二五	(16)	吉田本町二丁目	同　宇和島市	法華津屋久右衛門 油屋善三郎	恒星測定	百七十一
二六	(17)	同	同	同	同所逗留、地図を成。午後より忠敬病気。	
二七	(18)	奥浦枝中浦	同　宇和島市	本陣 中浦庄屋五郎太夫 組頭長三郎	恒星測定。忠敬病気	百七十一
二八	中食	白浦本浦	同　宇和島市	庄屋赤松佐左衛門		百七十一
	(19)	法華津本浦	同　宇和島市	法華津浦庄屋 祐左衛門		百七十一
二九	(20)	同	同	同	大風雨逗留、忠敬病気	
三〇	(21)	狩浜本浦	同　西予市	庄屋助左衛門 禅済家宗 徳寿山広福寺	忠敬病気	百七十一

文化五年七月　(1808)

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
一	(8.22)	高山浦枝田之浜浦	愛媛県西予市	田之浜浦組頭 与治兵衛	忠敬は病気、狩浜浦乗船直に当浦止宿に来る。恒星測定	百七十一
二	(23)	皆江浦	同　西予市	本陣庄屋源右衛門 補陀山済家見光寺	忠敬病気、直に当浦へ至る。高嶋一周測。恒星測定	百七十
三	(24)	周木浦	同　西予市	本陣庄屋民右衛門 済家宗大龍山光勝寺	忠敬は病気、直に当浦へ来る。恒星測定	百七十
四	(25)	沖大嶋　大嶋浦	同　八幡浜市	本陣源治郎　長八	地ノ大嶋、字小嶋道越より左右へ分測。山王嶋半周測。沖大嶋一周測。栗嶋半周測。恒星測定。 浅草暦局より用状相届。	百七十
五	(26)	川名津浦	同　八幡浜市	本陣庄屋与左衛門 済家宗玉泉山暁範寺	恒星測定	百七十
六	(27)	八幡浜浦	同　八幡浜市	庄屋浅井万兵衛	左嶋一周を測。	百七十
七	(28)	同	同	同	同所逗留。午中迄地図を成、午後より休。	
八	(29)	川之石浦	同　八幡浜市	本陣庄屋六郎兵衛 組頭忠四郎	恒星測定	百七十

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
九	(30)	川氷田浦	同 八幡浜市	本陣庄屋 辻庄右衛門 安左衛門	横切峠にて、内海外海、山嶋を測。黒嶋一周を測。	百七十
十	(31)	九町浦	同 伊方町	本陣庄屋 伝左衛門 同人隠宅		百七十
十一	(9.1)	同	同	同	波浪高大風雨。郡代下役一同申差留に付逗留。地図をなす	
十二	(2)	三崎浦枝大久浦	同 伊方町	本陣組頭 甚右衛門 百姓 伝左衛門		百七十
十三	(3)	三崎本浦	同 伊方町	本陣庄屋 小倉部蔵 同人隠宅		百七十
十四	(4)	串浦	同 伊方町	本陣組頭 万治郎 百姓 又右衛門	本岬(佐多岬・御鼻)を測	百七十
十五	(5)	三崎浦枝二名洲浦	愛媛県伊方町	本陣組頭 勘左衛門 医師 宗見	恒星測定	百七十
十六	(6)	同	同	同	雨天逗留地図を成。恒星測定	
十七	(7)	三机浦枝神崎浦	同 伊方町	本陣組頭 祐右衛門		百七十
十八	(8)	同	同	同	雨天逗留地図を成。	
十九	(9)	三机浦	同 伊方町	庄屋 菊池宇右衛門	恒星測定	百七十
二十	(10)	同	同	同	同所逗留測。坂部外三名地図	
二一	(11)	喜木津浦	同 八幡浜市	庄屋 菊池治郎左衛門	恒星測定	百七十
二二	(12)	磯崎浦	同 八幡浜市	本陣庄屋 源兵衛 百姓 千治	坂部外二名地図に先行	百七十
二三	(13)	同	同	同	雨天逗留。	百七十
二四	中食	櫛生村	同 大洲市	庄屋 水沼利介		百七十
	(14)	長浜町	同 大洲市	本陣佐々木源三兵衛 平野屋幸右衛門		百七十
二五	(15)	同	同	同	曇天逗留地図を成。恒星測定	百七十
二六	後手中食	八多喜村	同 大洲市	庄屋 新八		百七十
	先手中食	若宮村	同 大洲市	庄屋 杢助		百七十
	(16)	大洲城下本町壱町目	同 大洲市	本陣領主用意宿 末光清三郎	大洲領主、新谷領主の両領主より贈物町方(売払代金にて請取。恒星測定。幸便に暦局(書状を相頼	百七十
二七	(17)	長浜町	同 大洲市	本陣佐々木源三兵衛 平野屋幸右衛門		百七十
二八	(18)	上灘村	同 伊予市	本陣庄屋 都築元三郎 奥崎伝三郎	恒星測定	百六十八
二九	(19)	灘町	同 伊予市	本陣 宮内小三郎 宮内惣右衛門	坂部外二名米湊灘町(先行地図を成。	百六十八

文化五年八月（1808）

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
一	（9.20）	三津町	愛媛県松山市	唐津屋治郎右衛門 門田屋市五郎	領主より贈物あり。暦局より御用状届。	百六十八
二	（21）	興居嶋 門田組	同 松山市	本陣堀内五左衛門		百六十八
三	（22）	同	同	同	釣嶋一周測	百六十八
四	（23）	同	同	同	大西風、舟行難成。同所逗留。地図を成。恒星測定	
五	（24）	津和地嶋 津和地村	同 松山市	本陣会所 百姓小左衛門	百合嶋一周を測。横嶋一周を測、二神嶋一周測。恒星測定	百六十九
六	（25）	同	同	同	同所逗留測	百六十七
七	（26）	中嶋（忽那嶋） 吉木村	同 松山市	本陣大庄屋格 忽那柳太郎	松山領。クダコ嶋一周を測～大館場嶋一周を測～小館場嶋を測。	百六十八
八	（27）	忽那嶋（中嶋） 大浦村	愛媛県松山市	本陣庄屋 堀内吉左衛門 百姓善蔵	大洲領。下河辺、稲生地図 恒星測定	百六十八
九	（28）	同	同	同	高嶋一周測。 下河辺、稲生地図	百六十七
一〇	（29）	無須喜嶋 無須喜村	同 松山市	本陣庄屋市郎左衛門 百姓六郎右衛門		百六十八
十一	（30）	松山城下府中町	同 松山市	本陣城下会所		百六十八
十二	（10.1）	同	同	同	同所逗留、地図を成。江戸暦局行書状、明日の幸便に相頼 恒星測定	
十三	（2）	同	同	同	同所逗留、地図を成。	
十四	（3）	道後村	同 松山市	本陣温泉主明王院 鹿島屋平吉		百六十八
十五	（4）	同	同	同	雨天逗留、地図を成。八幡参拝	
十六	中食	堀江村	同 松山市	庄屋甚之助		百六十八
	（5）	辻村内辻町 北条村内北条町	同 松山市	本陣 年寄布屋勘左衛門 年寄布屋七右衛門	恒星測定	百六十八
十七	（6）	浜村	同 松山市	本陣 真言宗新儀遍照院	鹿嶋一周を測。恒星測定	百六十四
十八	（7）	九王村	同 今治市	本陣 大庄屋村瀬四郎三郎 改庄屋格村瀬忠三郎	新海程太郎、堀内五兵衛、松山城下より付添、大清会典の暦象考成を貸し、道後にて返す。後に日纏推歩の草を貸す、此所にて返す。歴学入門を願、両人にて太織嶋一端を贈る。八線表月離推歩草二冊を貸す、十月初迄に大坂間氏相送るの約なり。恒星測定	百六十四

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
十九	（8）	波方村波止浜	今治市	本陣大庄屋格 庄屋長野助三郎 郷士格渡辺政右衛門		百六十四
二十	（9）	同	同	同	同所逗留測	百六十四
二一	（10）	今治城下室町	今治市	本陣室町横丁 大西佐源吾 柳瀬丈作	御領主より御贈物被下置。江戸暦局より御用状届。	百六十四
二二	（11）	同	同	同	大比岐嶋一周、小比岐嶋一周を測。大平市嶋一周を測、小平市嶋を遠測。	百六十四
二三	（12）	同	同	同	昨日支隊帰宿遅に付同所逗留	百六十四
二四	（13）	同	同	同	大風に付、同所逗留	百六十四
二五	（14）	同	同	同	測量日記に記入無し	百六十四
二六	弁当	黒本村	同 西条市	庄屋弥惣右衛門	忠敬病気、測量隊と別行動	百五十八
	（15）	今在家村	同 西条市	本陣庄屋徳五郎 百姓久五郎	小松領主殿より贈物。執斗にて売払。	百五十八
二七	（16）	西条城下本町 中町	同 西条市	掛屋亮平 天満屋猪之吉	忠敬、坂部、柴山、稲生病気、直に西条城下へ行。御領主より贈物。是も同前売払。	百五十八
二八	（17）	同	同	同	同所逗留。此日より文助病気。恒星測定	
二九	（18）	同	同	同	同所逗留測。忠敬、坂部、柴山、病気、	百五十八
三〇	（19）	新居浜浦	同 新居浜市	本陣彦三郎 市郎兵衛	忠敬、坂部、柴山、文助病気、乗船して直に新居浜浦へ越。	百五十八
文化五年九月	（1808）					
一	（10.20）	垣生村	愛媛県新居浜市	本陣庄屋祐右衛門 小左衛門	忠敬、坂部、柴山、文助病気、直に垣生村に至る。恒星測定	百五十八
二	（21）	大嶋 大嶋浦	同 新居浜市	本陣弥市右衛門 庄屋村上長十郎	忠敬、坂部、柴山、文助及佐右衛門、庄作、籐吉皆時行風邪にて直に大嶋浦に至る。黒嶋一周を測。恒星測定	百五十八
三	（22）	同	同	同	大嶋一周を測。稲生は地図、忠敬病気。	百五十八
四	（23）	蕪崎村	同 四国中央市	本陣庄屋加地新兵衛 市左衛門	忠敬、坂部、柴山、文助、庄作、籐吉病気、乗船直に蕪崎村に至る。各時行風邪なり	百五十八
五	（24）	同	同	同	雨天逗留。下川辺、稲生地図	
六	中食	中之庄村	同 四国中央市	坂上滝右衛門	忠敬（前日より恒星測量、日記等を写す）、坂部、柴山、文助、庄作、籐吉 風邪。	百五十二
	（25）	三嶋村	同 四国中央市	本陣前谷祐治 石川多源治	領主より贈物。執斗にて売。	百五十二

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
七 *	(26)	川之江村新町上町 新町下町	同　四国中央市	本陣脇屋仲助 松屋与四郎	忠敬、坂部、柴山、文助、庄作、籐吉全快。三島村出立。村松村、妻鳥村を歴て川之江村に至る。松山候より贈物。執斗にて売払。	百五十二
八 *	(27)	同	同	同	忠敬、下河辺、青木、稲生、同所逗留地図。善八風邪病気。 恒星測定	
【支隊】		半田村枝平山	同	百姓嘉右衛門	坂部外三名、川之江村から笹ケ峯まで測量	百五十二
九 *	(28)	和田浜村	香川県　観音寺市	本陣藤村甚太郎 出来屋兵輔	丸亀候より贈物あり。執斗にて売払。	百五十二
【支隊】		馬立村	愛媛県　四国中央市	百姓石川仲之丞		百五十二
十 *	(29)	伊吹島	香川県　観音寺市	真言宗泉蔵院	大股島周囲を測、小股嶋を遠測	百五十二
【支隊】		馬立村	愛媛県　四国中央市	百姓石川仲之丞		百五十二
	忠敬	和田浜村	香川県　観音寺市	本陣藤村甚太郎	忠敬当所逗留	
	(30)	和田浜村	香川県　観音寺市	本陣藤村甚太郎 出来屋兵輔	忠敬当所逗留、伊吹嶋周囲を測。恒星測定	百五十二
十一 *	支隊昼休	半田村	愛媛県　四国中央市			百五十二
【支隊】		川之江村	同　四国中央市	松屋与四郎		百五十二
	(31)	観音寺中洲浦	香川県　観音寺市	本陣横山治右衛門 伊予屋清七	沈南頻掛物一幅を整	百五十二
十二	(11.1)	仁尾村	同　三豊市	本陣塩田長右衛門 善左衛門	小蔦嶋汎周を測。恒星測定	百五十二
十三	(2)	大浜浦	同　三豊市	本陣青元之丞	忠敬、秀蔵、仁尾村より直に大浜浦へ乗船して明十五日の月食測量の用意を成す。丸山嶋一周を測。暦局用状相届く。	百五十二
十四	(3)	同	同	同	逗留測食の用意を成。終日曇る。	
十五	(4)	積浦	同　三豊市	本陣 真言宗古義十輪院 利左衛門	恒星測定	百五十二
十六	(5)	粟嶋	同　三豊市	本陣徳太夫　権助	志々嶋一周終。恒星測定	百五十二
十七	(6)	松崎村	同　三豊市	本陣弥右衛門　兵蔵	領主より贈物持参。執斗にて売払。	百五十二
十八	(7)	多度津	同　多度津町	本陣熊蔵　安右衛門	亀笠嶋一周を測。	百五十二
十九	(8)	丸亀城下	同　丸亀市	本陣高嶋勘右衛門 大嶋屋吉蔵	忠敬外三名、陸道無測にて丸亀城下着	百五十一
二十	(9)	金毘羅松尾町内町	同　琴平町	本陣伊予屋半左衛門 多田屋治兵衛	恒星測定	百五十二
二一						

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
二二	(10)	丸亀城下	同　丸亀市	本陣高嶋勘右衛門 大嶋屋吉蔵	金比羅参詣。直に金光院へ立寄座敷一覧。無測にて丸亀へ帰着。恒星測定	百五十一
二三	(11)	塩飽本嶋　泊浦	同　丸亀市	仮亭主吉左衛門	忠敬、坂部、青木、稲生泊浦居て地図を成す。牛嶋一周を測。恒星測定。太閤秀吉公、東照権現様、台徳院様等の御朱印を塩飽嶋の記年控より書抜。	百五十一
二四	(12)	佐柳島	同　多度津町	嘉兵衛	恒星測定	百五十一
二五	(13)	手島	同　丸亀市	本陣庄右衛門 平三郎	佐柳嶋一周測。外に小嶋一周測。高見嶋一周を測。二面嶋遠測。	百五十一
二六	(14)	塩飽本嶋　泊浦	同　丸亀市	仮亭主吉左衛門	忠敬は測食の用意に手嶋より直に泊浦へ行。手嶋一周測。小手嶋一周測。	百五十一
二七	(15)	同	同	同	櫃石嶋一周、岩黒嶋一周、羽佐嶋及び歩渡嶋遠測。与嶋一周、鍋嶋遠測、室木嶋一周を測。忠敬測食の用意を成。午中太陽を測。恒星測定	百五十一
二八	(16)	同	同	同	塩飽本嶋一周測。恒星測定	百五十一
二九	(17)	同	同	同	向笠嶋、長嶋一周を測る。雀小嶋遠測。忠敬、坂部、下河辺、青木、明朝日食測量の用意に残居る。恒星測定	百五十一
文化五年十月	(1808)					
一	(11.18)	塩飽本嶋　泊浦	香川県丸亀市	仮亭主吉左衛門	同所逗留。日食を測、大遠鏡坂部、小遠鏡稲生、垂揺球柴山・青木、象限儀下河辺、子午線は前日前夜食前後共、忠敬食二分二厘を測得る。恒星測定	百五十一
二	(19)	宇足津浦	同　宇多津町	本陣竹屋玄七 蔦屋貞吉	忠敬は泊浦に残、太陽午正を測。下河辺、青木、風邪。共に乗船し宇足津へ着。小瀬居嶋一周を測。瀬居嶋一周を測、沙弥嶋一周を測。御領主より贈物あり。秀蔵へ御贈物下役衆同様ゆえ減少を申遣す。暦局より御用状届。恒星測定	百五十一
三	(20)	同	同	同	同所逗留測。下河辺、青木、風邪。忠敬、坂部地図。	百五十一
四	(21)	青梅村大藪	同　坂出市	本陣恒吉　孫十郎	林田村に綾川あり。其海を松ヶ浦という名所なり。恒星測定。 秀蔵へ御領主より被下の小菊紙十五枚となり。即、売払代金壱両弐歩持来る。	百四十六
五	(22)	生嶋	同　高松市	塩政所九郎右衛門 百姓幸助		百四十六
六	(23)	香西浦	同　高松市	本陣和泉屋林右衛門 河内屋茂右衛門	忠敬外三名、地図並日食測稿暦局行を認、高松城下より幸便に書状も可差出と生嶋出立。	百四十六

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
七	(24)	高松城下東浜町 新湊町	同 高松市	本陣鳥屋仁左衛門 堺屋清蔵	下河辺、稲生地図。 領主より贈物。恒星測定	百四十六
八	(25)	同	同	同	晴天、大風波浪高。女木嶋、男木嶋渡海難相成見合。執斗にて昨夜の贈物売払。	
九	本隊中食 女木嶋 本浦		同 直島町	庄屋友太夫	鳥井迄一周を測。	百四十五
	支隊中食 男木嶋		同 直島町	庄屋藤右衛門	男木嶋一周を測。	百四十五
	(26)	直嶋 高田浦	同 直島町	本陣庄屋藤右衛門 神主大偶	恒星測定	百四十五
十	(27)	同	同	同	三手分測。荒神嶋一周を測。柏島一周を測。向嶋一周を測。尾鷹嶋一周を測。直嶋積浦～高田浦止宿下の幟迄測、測量所迄打上。	百四十五
十一	(28)	同	同	同	三手分測。石嶋を手分測量。辻ケ影嶋一周を測、安野嶋一周を測。 局嶋一周、家嶋一周、寺嶋一周を測。恒星測定	百四十五
十二	(29)	同	同	同	三手分測。直嶋の残り及び上鴉嶋、下鴉嶋遠測。屏風嶋、喜兵衛嶋、牛ケ首嶋各一周を測。 坂部風邪	百四十五
十三	(30)	豊嶋 甲生村	同 土庄町	年寄片山十左衛門	豊嶋(渡て手分。恒星測定、坂部風邪	百四十五
十四	(12.1)	小豆嶋 土之庄村	同 土庄町	本陣庄屋 笠井三左衛門 庄屋分家武太夫	四嶋一周を測る。小豊嶋一周測。恒星測定	百四十五
十五	(2)	小豆嶋 伊喜末村	同 土庄町	本陣久兵衛 半十郎	恒星測定	百四十五
十六	(3)	同 小海村	同 土庄町	本陣庄屋大助 百姓惣左衛門	三手分測。千振嶋一周を測 桂嶋、沖嶋各一周を測。恒星測定	百四十五
十七	(4)	同 福田村	同 小豆島町	庄屋惣太夫	三手分測。金ケ崎周囲を測。小嶋(辨天島)一周測。恒星測定	百四十五
十八	(5)	同 橘村	同 小豆島町	年寄作太夫 百姓周作	城ケ嶋一周測。	百四十五
十九	(6)	同 坂手村	同 小豆島町	本陣年寄直治郎 同隠居宅	坂手村観音毘沙門(東岳)(立寄眺望。富ノ子嶋一周測。児島一周測。恒星測定	百四十五
二十	(7)	同 草加部村下村	同 小豆島町	庄屋茂治郎	三手分測。福部嶋一周を測。恒星測定。暦局書状相届	百四十五
二一	(8)	同 吉野村	同 小豆島町	古義真言宗正法寺	恒星測定	百四十五
二二	(9)	同 池田浜村	同 小豆島町	古義真言宗保寿寺	池田西岳観音に登て山嶋を測。恒星測定	百四十五
二三	(10)	高松城下東浜町 新湊町	同 高松市	本陣鳥屋仁左衛門 堺屋清蔵	恒星測定	百四十六
二四	(11)	牟礼村	同 高松市	古義真言宗洲崎寺	屋嶋一周を測。壇ノ浦は屋嶋の山東麓にて、安徳帝皇居の跡あり。	百四十六
二五	(12)	庵治浜村	同 高松市	本陣政所木村平四郎 百姓丈助	三手分測。大嶋一周を測。兜嶋、鎧嶋、稲毛嶋各一周測。恒星測定	百四十六

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
二六	(13)	志度村	同　さぬき市	本陣百姓伝右衛門 百姓忠治郎	高嶋一周を測。四国八十六番札所、古義真言宗普陀洛山清光院志度寺〈立寄、古筆画を一覧す。恒星測定	百四十六
二七	(14)	小田村	同　さぬき市	本陣百姓金三郎 百姓伊八郎	恒星測定	百四十六
二八	(15)	同	同	同	雨天逗留	
二九	(16)	同	同	同	西大風、測量難成逗留 地図	
文化五年一一月	(1808)					
一	(12.17)	小田村	香川県さぬき市	本陣百姓金三郎 百姓伊八郎	西大風、逗留地図	百四十六
二	(18)	津田村	同　さぬき市	質屋丸屋九郎右衛門	高嶋、猿子嶋遠測。	百四十六
三	(19)	三本松村	同　東かがわ市	本陣網屋治兵衛 米屋甚左衛門	女嶋一周測、丸上嶋を繋ぎ遠測。名古嶋、諸嶋遠測。恒星測定	百四十六
四	(20)	引田村	同　東かがわ市	本陣大政所 日下佐左衛門 井筒屋新兵衛	一ツ嶋、二子嶋遠測。領主より菓子一折被下置	百四十六
五	(21)	折野村	徳島県鳴門市	本陣浪人 遠藤吉郎兵衛 真言宗古義鬼骨寺	坂部外2名、直に折野村〈行、地図を成。通年嶋、沖嶋遠測。恒星測定	百四十二
六	(22)	櫛木村	同　鳴門市	本陣大庄屋 上原易兵衛 百姓泰治	坂部外2名、直に櫛木村に至て地図を成す。	百四十二
七	中食 (23)	北泊浦　小鳴門口	同　鳴門市	古義真宗 潮門山普光寺		百四十二
	(23)	堂ノ浦	同　鳴門市	古義真言宗 磯崎山吉祥寺	坂部外2名、直に堂ノ浦に行て地図。恒星測定	百四十二
八	中食	黒崎村	徳島県鳴門市			百四十二
	(24)	岡崎村	同　鳴門市	真言宗蓮花寺 真言宗法宗寺	3月20日印杭〈繋ぎ四国一周終る。秀蔵病気	百四十二
九	(25)	同	同	同	雪同所逗留。暦局行書状一封、大坂町奉行所・間清市郎〈書状、佐原行佐原屋庄兵衛〈直届書状出す。恒星測定	
十	(26)	同	同	同	同所逗留測。手分にて高嶋一周を測。恒星測定	百四十二
十一	(27)	淡路島　福良浦	兵庫県南あわじ市	本陣庄屋吉兵衛 庄屋角蔵	恒星測定	百四十二
十二 *	(28)	同　阿那賀浦	同　南あわじ市	本陣庄屋 中野太三兵衛 年寄山口甚右衛門		百四十二
【支隊】		同　中条村	同　南あわじ市	庄屋不藤敬右衛門		百四十二

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
十三 *	(29)	同 湊浦	同 南あわじ市	本陣嘉兵衛 常左衛門		百四十二
【支隊】		同 下内膳村	同 洲本市	古義真言宗清光寺	先山千光寺〈登り山嶋を測 千光寺は古義真言宗にて清浄皇院という、本尊 千手観音なり。	百三十八
十四 *	中食	同 鳥飼下村	同 洲本市	百姓平兵衛		百四十二
	(30)	同 都志浦大浦	同 洲本市	本陣百姓宅左衛門 庄屋助十郎		百四十二
【支隊】		同 志筑浦	同 淡路市	菅平兵衛		百三十八
十五 *	(31)	同 郡家浦 郡家浜村	同 淡路市	本陣庄屋志智源兵衛 安兵衛		百四十二
十六	(1809.1.1)	同 机浦	同 淡路市	本陣庄屋記兵衛 市兵衛	坂部外2名、直に机浦に行て地図。8日より秀 蔵病気。 恒星測定	百三十七
十七	(2)	同 岩屋浦	同 淡路市	庄屋宇右衛門 海部屋幸十郎	坂部外2名、直に岩屋浦に行て地図。秀蔵病 気。松尾崎、燈明堂にて合測。淡州一周終。領 主より贈物、執斗にて売払に成。	百三十七
十八	(3)	同	同	同	同所逗留地図	
十九	(4)	兵庫浦	同 神戸市兵庫区	明石屋藤左衛門	淡州渡海	百三十七
二十	中飯	西宮町	同 西宮市	脇本陣 小幡坪屋源兵衛		百三十五
	(5)	尼ケ崎城下別所町	同 尼崎市	会所儀助	恒星測定。大坂に大事有り。淀屋橋半町程西、 大川町失火にて西風、今橋二丁目裏通迄類焼	百三十五
二一	(6)	大坂淡路町	大阪府大阪市中央区	会所預幸七	昨夜の火事の為、尼ケ崎町止宿難成、急に操候 て淡路町止宿。東町奉行〈忠敬外4名着届に出 る。	百三十五
二二	(7)	同	同	同	間清市郎来る	
二三	(8)	同	同	同	大和路〈測量先触を出。	
二四	(9)	同	同	同	坂部、町奉行所〈罷越、大和測量を談す。	
二五	(10)	同	同	同	忠敬、東町奉行所へ、明日大坂出立の届に罷 越。暦局行書状持参相頼。	
二六	(11)	深江村	同 大阪市東成区	本陣長百姓弥七 庄屋五郎兵衛	内弟子秀蔵長病に付、添触を入、大坂より佐 原村まで下す。恒星測定	百三十五
二七	(12)	神立村	同 八尾市	年寄伊右衛門 嘉右衛門	恒星測定	百三十五
二八	(13)	竜田村	奈良県平群町	本陣松屋孫三郎 同人隠居宅	恒星測定	百三十五
二九	(14)	王子村	同 王寺町	百姓与治兵衛	王寺村に達磨寺あり。 王子村に孝霊天王陵あり	百三十五
三十	中食	狐井村	同 香芝市	酒屋彦右衛門	今市下田村、往来より右六七丁に、武烈天皇 廟あり。二三丁離て顕宗天皇の廟あり	百三十五
	(15)	当麻村	同 葛城市	大坂屋源兵衛	当麻寺参拝。恒星測定	百三十五

各地のニュース

石川県支部ニュース

加賀藩測量の足跡をたどる（一）

室山　孝

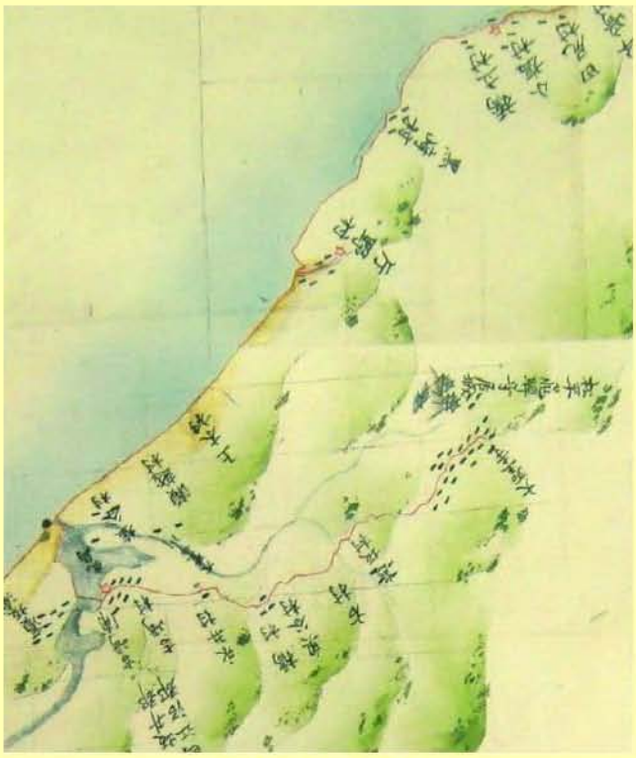
はじめに

会員四人の石川県支部は、行動的な河崎支部長に牽引されながら、今年から石川県内における伊能測量隊の足跡をたどる、伊能探訪に乗り出した。といっても、伊能探訪のいわゆる〝三種の神器〟がそろっている支部長頼みになりがちなので、せめて現地での出会いをもとめる突撃精神だけは自前で行きたいと思っている。探訪は、伊能隊が第四次測量で北陸へやってきた享和三年（一八〇三）の測量日記をもとに、宿泊地や休憩地をポイントとしておさえ、現況等を確認することに重点を置くことにした。

この踏査報告をまとめることで、将来現地に伊能測量隊の記念碑や標識が出来るきっかけになればというささやかな思いと、小中学生の伊能測量に関する身近な教材として利用していただければという大いなる野望も抱いている。とは言え、石川県内で三十七泊、手分け測量も含めて五十の宿所探しは、初めからかなりの「道遠し」感がある。（ちなみに、隣りの富山県は六泊で通過した。）

一、大聖寺城下・板屋太郎兵衛（6／24）

五月十一日（日）朝九時、白山市の大型ショッピングモール駐車場に全員集合し、相良会員の車に乗り合わせて出発。国道8号線を一気に南下し、まず加賀市大聖寺をめざす。ここは加賀前田家の支藩大聖寺藩十万石の城下町であった。伊能隊は六月二十四日（新暦では八月十一日）越前吉崎浦を出発し、この日大聖寺の「本町板屋太郎兵衛」方に泊まった（のちに書き改めた際、「松屋太兵衛」としたが、おそらく書き誤りではないか）。



大聖寺近辺の大図
（「完全復元伊能図全国巡回フロア展in金沢工業大学」）

年次未詳「大聖寺町図」部分
（金沢市立玉川図書館大友文庫）

『加賀市史』の付録に、天明六年（一七八六）以前の、町家の屋号も載せた詳しい城下町絵図がある。これで、本町通り真宗大谷派慶徳寺の向い側にある「板ヤ」に目星をつけ、現在の『住宅明細図』を頼りにその辺りで聞き取りをした。それによると、この辺りの家の多くが間口は四間、奥行きは十四、五間。隣の空地にかつてあった家にはお婆さんが一人住まいで、その頃は家の前に昔からの馬繋ぎ設備が残っていたということであった。この馬繋ぎの話でそこが伊能隊の宿泊した「板屋」の一角であったことを確信した。今は新築住宅と駐車場となっている。駐車場隣の間口の大きな家も気になり、特に奥に古そうな土蔵が見えることから、訪ねて話を聞いたが、よくわからないとのことであった。

実は、探訪の翌日、石川県立図書館で『歴史の道調査報告書第一集 北国街道』を閲覧していたところ、「道の現況」に大聖寺の「板屋」の項目があり、そこは近世、伝馬肝煎・本陣を勤めた伊東家であったこと、明治初期建築の伊東家はその後所有者が二回代わり、その間、増改築が行われたため往時の本陣の面影は失われてしまったことが書かれ、我々が見た駐車場隣の間口の大きな家がか

つての「板屋」として写真が示されていた。

かつての「板屋」跡地に建つ間口の広い家

『歴史の道調査報告書』のこの部分を執筆した山口隆治氏に確かめたところ、伝馬肝煎の家は一般に間口が広く造られており、今の駐車場付近から写真の家までがかつての「板屋」であったと推定されるとのことだった。とすると、我々が目星を付けた場所は「板屋」の北端に当たり、そこに馬繋ぎ設備があったということになる。また別の日に、金沢市立玉川図書館大友文庫にある、年次不詳の大きな「大聖寺町図」を閲覧したところ、「板屋」は慶徳寺の山門より間口が大きく描かれており、伝馬肝煎・本陣である特徴を示していた。なお、「板屋」の伊東家文書が『加賀市史資料編第二巻』に収録されていたので、寛政年間～明治四年の「諸家様本陣相勤日記」を見たが、年月日記載は文政七年八月以降であり、伊能隊の宿泊記録はなかった。

二、吉崎浦・東本願寺かけ所（6／23）

大聖寺から国道三〇五号線で、石川県境に隣接する福井県最北部あわら市吉崎町へ向かった。大図で伊能隊の測線を見ると、吉崎から大聖寺までの当時の道は少しうねうねと曲がっており、その旧道はまだ残っていると思われたので、三木町（右村）と永井町（永井村）の中間付近に車を止め、水田畝横の小道を渡って旧道を歩いてみた。旧道は、山際近く木立もあるところをゆるやかに続いていた。かつて伊能隊もこの道を汗を拭いつつ測量しながら通ったと思うと、みな感慨ひとしおであった。伊能隊は六月二十三日に、越前海岸の梶浦（福井県坂井市）から加賀国塩屋（大聖寺川の河口付近、加賀市）の地先まで測量したあと、北潟湖を舟で渡り、吉崎の「東本願寺かけ所」に泊まった。日記には「此夜曇ル、〔不測〕」とあるが、大図には天測の☆印がある。雲の晴れ間に天測できたと思われるが、後日日記を書き改めた時、忠敬は「不測」と勘違いしたのであろうか。

三木町（右村）へ続く山裾の旧道

吉崎は戦国時代、比叡山によって京都を追われた本願寺蓮如が、朝倉氏の支援を得て坊舎を築き、文明三年（一四七一）から約四年間滞留して、北陸門徒の教化につとめたことで知られる。忠敬ら宿泊の「東本願寺かけ所」とは、今の真宗大谷派吉崎別院（東別院）のことであり、『福井県史資料編4中・近世二』によると、享保六年（一七二一）に建てられている。吉崎駐車場のすぐ前は、西別院（浄土真宗本願寺派吉崎別院）であり、その前を左手に迂回すると、奥の左手に大きな東別院山門が見えた。ところが、その間に細い石段の参道があって、登り口に赤字で大きく「吉崎御坊の参拝・資料館は正面」と書かれた「吉崎御坊願慶寺」の案内板と、「旧御本堂跡登り道」の石柱が立ち、「嫁おどし伝説の寺」との別の案内板もある。

「著名人の足跡⇒芭蕉・伊能忠敬・加賀の千代女・・・」とある

願慶寺参道
（左手鐘楼が吉崎東別院のもの）

願慶寺を訪ね、訪問の主旨を話すと、住職和田重厚氏が親切に対応され、願慶寺の役割をお話された。東別院は江戸時代に建立されたもので、役所的な仕事をしており、願慶寺に江戸時代の役務日記が残っているという（『福井県史資料編』には未掲載）。伊能隊宿泊のことも書かれていたようだとのことで、後日その役務日記の閲覧を依頼した。それが確認できれば、伊能測量に関する新史料発見になるのだが、何とか期待したい。願慶寺では、江戸時代の住職が蓮如の吉崎在住の頃をしのんで描いたと

いう、横長の「吉崎御坊周辺絵図」を拝見。また伊能隊が吉崎に着いた船着き場は、今の蓮如記念館付近ではないかと住職は話された。その後、吉崎駐車場横の食堂で一同昼食をすませ、北潟湖畔のボート船着き場から写真を撮った。測量隊は向こう岸から船でここへ渡ってきたのだ。大図には真っすぐな測線が北潟湖上に引かれている。

湖上に真っすぐな測線が見えるような北潟湖

三、片野村・肝煎木屋源右衛門（6／25）

ついで大聖寺川河口の塩屋へ向かい、河口付近とそこからの景観も写真に収めた。測量日記によると、六月二十五日、大聖寺を発ち、大雨のなか塩屋に到着するが、雨が止んだあと大風となり、昼食を取って数刻ここで過ごしている。大図の測線は塩屋からしばらく単調な加賀海岸に沿って北上し、次の宿泊地である片野村で少し内陸に入り、天測の☆印が記されている。その片野へ向かう。

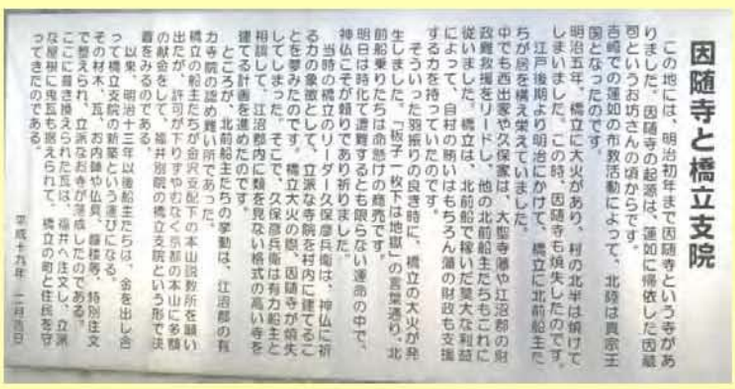
片野でまず塩屋方向の海岸線の写真を撮る。伊能隊が歩いた砂浜である。片野の浜は、北側にちょっと海へ突き出した崖が形成されて小さな入り江になっており、そこへ注ぐ小さな川沿いに道路と集落が伸びていた。測量日記に、「肝煎木屋源右衛門」方に止宿とあるが、『住宅明細図』を見ても「木屋」の名はない。☆印の位置は、海岸からおよそ二百五十メートル付近と思われたので、そのあたりにある家の方に話を聞くが、よくわからないとのこと。結局宿所の位置は確認できず、次のポイントである橋立へ向かう。

四、橋立村・一向宗照谷山因随寺（6／26）

大図では片野から先、小塩あたりまでの海岸線の書き方が何かおかしく、橋立近くのあるべき景勝地である「加佐ノ岬」や「尼御前岬」が書かれていない。このあたりは隆起地形で海蝕による断崖が続き、伊能隊は海岸線を測量できず、やや内陸の海岸に近い道を測量し、実際の海岸線は聞き取りで予測線を書いたのではないかと思われる。橋立へ向かう途中、「加佐ノ岬」へ立ち寄って岬の灯台まで歩いた。今は遊歩道が整備され、岬の先端付近まで下りることができるが、伊能隊の頃は人跡をも拒む厳しい地形だったのである。

加佐ノ岬（海岸線は不測量）

測量日記によると、六月二十六日、伊能隊は片野を出たあと午前に橋立に到着。宿は「東方一向宗因随寺」とあるが、現在その寺はない。橋立の町中にある真宗大谷派福井別院橋立支院の場所が因随寺の跡地ではないかと予想し、地元の『橋立町史』を調べると、その通りであった。因随寺は明治五年（一八七二）の橋立大火で類焼し、再建が検討されたものの数年を経てもまとまらず、ついに住職も引退して無住となり、同十二年に信徒一同の協議で福井別院の支院として再建されたという。橋立支院を訪ねると、境内に巨大な鬼瓦が安置され、別院建立についての説明板が据えられていた。この鬼瓦は因随寺のものかと期待したが、そうではないとのことだった。橋立は江戸後期から明治にかけて、多くの北前船の船主たちが屋敷を構えていた湊町で、現在は国の「重要伝統的建造物保存地区」に指定され、橋立支院近くに残る大きな屋敷の一つは、「北前船の里資料館」として公開されている。



因随寺と橋立支院

この地には、明治初年まで因随寺という寺があり
ました。因随寺の起源は、蓮如に帰依した因蔵
司というお坊さんの頃からです。北陸は真宗王
吉崎での蓮如の布教活動によって、北陸は真宗王
国となったのです。
明治五年、橋立に大火があり、村の北半は焼けて
しまいました。この時、因随寺も焼失したのです。
江戸後期より明治にかけて、橋立に北前船主た
ちが屋敷を構え栄えていました。大聖寺藩や江沼郡の財
政難救援をリードし、他の北前船主たちもこれに
従いました。橋立は、北前船で稼いだ莫大な利益
によって、自村の寺院はもちろん藩の財政も支援
するカを持っていたのです。
そういった羽振りの良き時に、橋立の大火が発
生しました。「仮子一枚下は地獄」の言葉通り、北
前船乗りたちは命懸けの商売です。明日は時化で遭難するとも限らない運命の中で、
神仏こそが頼りであり祈りました。
当時の橋立のリーダー久保彦兵衛は、神仏に祈
るカの象徴として、立派な寺院を村内に建てるこ
とを夢みたのです。橋立大火の際、因随寺が焼失
してしまった。そこで、久保彦兵衛は有力船主と
相談して、江沼郡内に類を見ない格式の高い寺を
建てる計画を進めたのです。
ところが、北前船主たちの挙動は、江沼郡の有
力寺院の疑め難い所であった。
橋立の船主たちが金沢支配下の本山浄教所を願い
出たが、許可が下りずやむなく京都の本山に多額
の献金をし、福井別院の橋立支院という形で決
着をみるのである。
以来、明治十三年以後船主たちは、金を出し合
って橋立支院の新築という運びになる。
その材木、瓦、お内陣や仏具、藤棚等、特別注文
で誂えられ、立派なお寺が落成したのである。
ここに書き換えられた瓦は、福井へ注文し、立派
な屋根に鬼瓦も据えられて、橋立の町と住民を守
ってきたのである。

平成十九年　二月吉日

宿所因随寺の変遷について

五、安宅浦・網七左衛門（6／27）

次に小松市安宅町に向かう。梯川河口北岸に面する安宅は、歌舞伎「勧進帳」の「安宅の関」の舞台としても著名であるが、江戸時代後期から明治にかけて、橋立と同じように北前船の拠点の一つとして繁栄した湊町であった。

測量日記には、二十七日午後安宅浦に着き、「田端町網七左衛門」方に止宿とあり、夜は曇天で天測していない。地元安宅町在住茶村外男氏の『私本安宅ものがたり』が伊能測量にふれ、「田端町」は「川端町」の誤りで、「網」は「網屋」であり、七左衛門の子孫は地元に残っていないという。『新修小松市史資料編2小松町と安宅町』を見ると、口絵に文政年間の「安宅町図」が掲載され、安宅九町のうち梯川沿いの通りは確かに「川端町」とあり、また「安宅町文書」で、「網屋七左衛門」は北前船主で町年寄を勤める家であることがわかった。しかも文政二年（一八一九）の文書の中で、加賀藩御用宿の筆頭に挙がっており、先の「安宅町図」は文政五年の外国奉行巡検の際に作成されたと思われ、「川端町」の「御小休所」とされる所を「網屋七左衛門」方と推定した。

福井別院橋立支院（因随寺跡地）

文政年中「安宅町図」部分（金沢市立玉川図書館大友文庫）

測量隊の宿所は「川端町」だった

安宅の古い町並みは、通りが碁盤目状に近いながらとても狭く、車の往来も難儀であった。目星を付けた場所は駐車場と石垣で高くなった空き地が目立ち、向かい側に大きな料亭が、梯川を背にして建っていた。その隣の釣具店で話をうかがう。かつての町名は今使われないが、「川端町」とそれに交わる「札抜（札木）町」の通り、また「船渡河道」を確認でき、かつて向かい側の区画はすべて道路より石垣で高くなっていたものの、料亭が角地に駐車場を造成したため、そこだけ道路と同じ高さになったという。

我々は駐車場と一段高い空き地を含む区画一帯が「網屋七左衛門」宅の跡地と推定し、写真を撮った。空き地には道からの上がり口の階段が残り、左手駐車場側に、ある程度樹齢がありそうな黒松と灌木が立つのみであった。

「網屋七左衛門」宅跡推定地

六、本吉町・嶋田屋万右衛門（6／28）

次は本日最後の予定地、白山市美川中町である。測量日記に、二十八日石川郡本吉（もとよし、元吉とも書く）町「嶋田屋万右衛門」方に止宿、夜は晴天で天測したとある。ここは加賀最大の暴れ川である手取川河口北岸に面し、橋立や安宅と同様、江戸後期から明治にかけて北前船の船主が多く居住した。対岸の能美郡湊村にも多くの北前船主が居住しており、明治になって両地区が合併、美川町が誕生した。しかしその後分離するなど変転し、昭和二十九年、新しい美川町となり、平成の大合併で白山市の一部となっている。その間、明治五年（一八七二）、県庁が金沢から移転し、県名も「金沢県」から郡名をとって「石川県」と改められ、一年足らずであったが県政の中心地となった。その旧県庁のあった所には、「石川ルーツ交流館」（平成十四年）が建てられている。戦前の『美川町史』によると、十八世紀末頃、本吉には七百石積の北前船が七十八艘もあったというから、伊能隊が測量に訪れた頃、全盛を誇ってい

たことになる。「嶋田屋万右衛門」の名も、船主が多く住んでいた「郎平辻」という一角の船主の一人として登場するが、町の役職等は明らかでない。

『住宅明細図』や電話帳で、旧本吉の幹線通りである「中町」通りに「嶋田屋」姓の家を探したところ、該当すると思われる家を一軒見つけ、探訪の前日電話でお話を聞いた。しかし、旦那寺である近くの真宗寺院が天保五年（一八三四）あるいは安政五年（一八五八）の大火に逢い、過去帳を焼失してしまったため、万右衛門が先祖かどうか確認できないとのことであった。それでもこの日訪問すると、以前の家は同じ中町の通りの向かい側、西方へ七、八十メートル程戻ったあたりにあったと話され、大火のあと作成された天保十一年の「本吉絵図」を翻刻した地図のコピーを見せていただくと、そこには「嶋田屋善兵衛」とあった。

後日、平成十七年発行の『本吉港の歴史』を見ると、地元の郷土史家である中正勲氏が「伊能忠敬本吉宿泊記」というコラムを書いていた。これによると、嶋田屋万右衛門は享和元年に郎平辻の「新町西角」にいたとあり、文化・文政年間の「本吉町住居表示絵図」にも「荒町西」（今の神幸町）に万右衛門宅があった。

また「本吉御用留」などに伊能隊宿泊の記録がないのは、加賀藩が伊能隊を隠密がましいとして協力的でなかったからであろうと見ている。

白山（左）と富士写ガ岳（加賀海岸各所より両山の方位を測った）

結局、中町の「嶋田屋万右衛門」宅は特定できなかった。

あとがき

こうして石川県支部の伊能測量の足跡を訪ねる初めての探訪は、いくつかの課題を残して時間切れとなった。各地でお話をうかがいお世話になった方々にお礼を申し上げたい。新参会員の小生が報告の担当になったが、下調べが充分でなく、反省している。また現地で関係者から直接情報を得ることの重要さを知った。そして踏査のあと、もう一度確かめる（文献でも、聞き取りでも）ことも大切だと感じた。それがこの報告をまとめるに当たって得た自戒である。なお、この日の参加会員は、河崎・相良・寺尾・室山の四名である。次回探訪は七月下旬に予定している。

笹山領測量二〇〇年記念
伊能忠敬ミニフロア展

二〇一四年3月29日（土）・30日（日）10時～17時

於：篠山市民センター

伊能忠敬笹山領探索の会
会長　加賀尾　宏一

拝啓　春爛漫の候　ますますご清祥のこととお喜び申しあげます。平素は格別のご高配を賜り厚くお礼申しあげます。

さて、このたび笹山領測量二〇〇年の記念事業として開催いたしました。

「伊能忠敬ミニフロア展」には、関係各位の絶大なるご支援をいただきありがとうございました。

お陰をもちまして、両日にわたり、伊能忠敬ファンの地元はもとより、遠方から多くの方々にご来場いただき、篠山市立篠山市民センター開設以来の八〇〇人に至るイベントとなり、盛況裡に終えることができました。

特に、星埜由尚氏による「伊能忠敬の全国測量と笹山領の測量道」の貴重な講演会は満席となり、篠山の歴史に関心を寄せる参加者の聞き入る姿に深く感銘いたしました。

ここに簡略ながら、当日の模様を写真にまとめましたので、ご高覧いただければありがたく存じます。

今後とも、私どもの活動に、ご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申しあげます。

まずは、略儀ながら、ご報告かたがた、お礼申しあげます。

特別講演会「伊能忠敬の全国測量と笹山領の測量道」講師　星埜由尚氏

丹波国多紀郡笹山領の測量道と周辺の各領を描く伊能大図（29 枚）

伊能測量隊機器（梵天・間縄・鉄鎖・量程車・小方位儀・彎窠羅針・半円方位盤・中象限儀）

伊能大図と現地形図の重ね図・園田家文書

最新測量機器

香取支部ニュース

伊能　楯雄

一　伊能忠敬墓前祭について

五月十七日（土）香取市の観福寺において、伊能忠敬墓前祭が伊能忠敬顕彰会設立準備会（代表世話人山村増代氏）により執り行われた。伊能家墓域内の「有功院成裕種徳居士」と標された忠敬の墓石前に仮祭壇が設けられ、同寺住職・田中量信師ほか二人の僧侶により法要が行われ参列者全員が焼香、その後、本堂内客殿に移り、準備会の伊能敏雄氏の司会進行のもと懇談会が開かれ、冒頭、山村増代氏から参列者へのお礼とともに、顕彰会の会長が決まり近く正式に設立の運びとなる旨の挨拶があった。しばし懇談の後、散会。

当日の参列者は、香取市教育長、伊能忠敬記念館長はじめ三十名程、伊能忠敬研究会香取支部からは木内信次支部長ほか六名が参加した。

（付　記）

・伊能忠敬墓前祭は、今から八十一年前の昭和八年三月二十八日に佐原町議会において、忠敬の命日（文政元年四月十三日）にあたる太陽暦の五月十七日を「忠敬祭」と定める旨議決したことに始まる。以降佐原町から佐原市そして香取市とかわっても引続き行政の手により墓前祭が行なわれてきたが、数年前、行政が直接特定の宗教行事に関わることは好ましくないとの判断から中止され、昨年から伊能忠敬研究会会員を中心とした民間の有志（準備会世話人）により新たに催行されることになったものである。

・ここ観福寺は真言宗の古刹で、四季折々の花々が広い境内を彩り来訪者を楽しませてくれるが、この時期は青楓の参道が美しく清々しい（写真）。余談になるが、今ＮＨＫ朝の連続ドラマ「花子とアン」の一場面として放映された。

二　伊能忠敬ＮＨＫ大河ドラマ化推進協議会について

五月二十三日（金）香取市佐原中央公民館において、平成26年度総会が開催された。木内志郎会長の挨拶に続き、同会の顧問である香取市長・宇井成一氏、衆議院議員・林幹雄氏、参議院議員・豊田俊郎氏、県議会議員・伊藤和男氏、前衆議院議員・谷田川元氏からそれぞれ挨拶があった後、議事が進められ全ての議題（前年度事業報告及び決算、新年度事業計画及び予算）が異議なく承認された。

（一）木内会長は挨拶の中で、伊能忠敬顕彰会は7月には設立できる見込みであり、会長には坂本文夫氏（香取市佐原・坂本医院院長）、副会長の3名も内定した旨報告があった。

（二）宇井市長の挨拶（教育長代読）には、大河ドラマ化については、出来る限りの支援をしていく旨のメッセージがあった。（なお、伊能研会員でもある宇井市長は、本年四月の香取市長選挙において再選され、任期は忠敬の没後二〇〇年にあたる二〇一八年四月までとなる。ドラマ化、二〇〇年記念事業の推進に期待がかかる。）

（三）前年度事業報告において、忠敬が測量で歩いた沿岸や街道筋の一七四自治体の首長から大河ドラマ化要望の署名をいただいたこと、また本年度計画として、更に署名を増やしたうえで、ＮＨＫに再度要望書を提出することが盛り込まれ説明された。

総会終了後、推進協議会主催による童門冬二氏の「いま伊能忠敬に何を学ぶか」と題した講演があった。講演は次のような話からきりだされた。

「大河ドラマ化には、三つの条件がある。一つは全国区の人（知名度のある人）であること。二つはホー

ムドラマになりうる人（気持ちや行動が多くの人に理解される人）であること。三つ目は女性関係が賑やかな人であること。このように言われているが、私がどのようなことで忠敬を推挙するのかを、これから話したい。」

童門氏の話に関係者大いに励まされ、また講演会には会員以外の多くの市民にも参加してもらい大盛況、ドラマ化推進を広く理解してもらううえからも大変有意義な催しとなった。

（終）

■ 会員便り

狼勢津子さん(神奈川県)
香取市出身、旧姓が伊能なので、忠敬先生のことをしっかり勉強させていただきたいです。

塚本倫正さん(千葉県)
佐原の木内信次さん忠敬研究会(佐原方面)で頑張っています。

島田泰枝さん(千葉県)
外川ミニ郷土資料館で来館者の方々に毎日アピールしています。

高木富子さん(東京都)
とても読みでのある会報、楽しみにしております。

前嶋初枝さん(千葉県)
この4月末、満91歳を迎えました。義父（前嶋成）は稲女系高宮家の出身。学問一筋の人で、旧制中学、新制高校で長い間、教鞭をとっておりました。面立ちが忠敬翁にそっくりでした。
翁の肖像画を見るたびに、一徹人だった義父を懐かしく思い出します。

伊能二三代さん(札幌市)
皆様お元気でしょうか。4月から就労継続支援B型事業所の所長として勤務いたします。大河ドラマ、待ち望んでいます。

原田照男さん(神戸市)
ほとんど家に引きこもって音楽番組の録画などに精を出しているところです。

打田元輝さん(札幌市)
大河ドラマ化の署名少し集めましたので後日送ります。

大沼晃さん(神奈川県)
地図を片手にトルコ周遊の旅を楽しんできました。所在地が分かるので大変助かりました。

平川定美さん(長崎県)
伊能忠敬相浦(佐世保市)測量二〇〇年記念碑建立、4月末予定。

谷垣忠利さん(兵庫県)
平成21年5月、脳梗塞で倒れ、現在療養中です。

吉田義昭さん(岩手県)
郷土文化研究所盛岡を主宰しています。もっと勉強してから投稿します。

三木敏明さん(兵庫県)
今年は三厩へ行こうと思っています。

城野幹丈さん(佐賀県)
なかなか勉強不足が続いています。今後もよろしくお願い致します。

堀野正勝さん(茨城県)
伊能図フロア展の全国展開も残すところ1年。頑張って終息をさせたいと思います。

石嶋博行さん(千葉県)
地元の宮内敏様の活動はすばらしいです。

荻原一輝さん(神戸市)
(奥様の博子さまより)
2月2日に亡くなりましたので退会をお願いいたします。立派な会になられますことを祈っております。

矢能彰さん(埼玉県)
大動脈解離で長期入院後まもなく一年です。通院とリハビリが殆んどの生活ですが、少しづつ社会に触れはじめました。

井上靖子さん(埼玉県)
何時も研究誌をお送り頂き感服しつつしっかり拝読して居ります。残

念ながら高齢（91歳）の為何かと欠席でお許し下さい。

石川清一さん（福岡市）
公民館の仕事をもう少し続けるため、自由な時間の制約を受けますが、2月に飯塚市近大体育館での大図巡回フロア展で福岡周辺の会員有志と渡辺一郎先生を囲み昼食をご一緒しました。

川上清さん（茨城県）
3月15～16日、私たち水戸歩く会には大きな行事の第3回水戸観梅ツーデーウォークを行います。偕楽園の梅が咲き揃う頃です。来年どうぞいらっしゃい。

座間喜美さん（東京都）
冊子が大判になり図形も写真も大変殖えたように思い見易くなって喜こんでおります。特に最後の資料「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」は転勤により各地を移動した為か大変興味深く読ませて頂いております。今後も続けて御健闘下さいませ。

秋間　実さん（神奈川県）
なんとか生きながらえて（86歳）まだ「もの書き」を細々とやっております。総会はたのしみです。

江口俊子さん（千葉県）
1月に引越しました。前の家から車で5分の所です。収納した場所を忘れて、ウロウロしている毎日です。

藤田淑子さん（東京都）
母伊能万寿子が6代目ときいておりますが、私は藤田に嫁ぎ、離れました。母の姉の子孫は、忠敬さまの額やその他お持ちです。

岩村哲さん（京都市）
63才になりました。ニッシャビジネスサービス（株）で施設警備員指導教育責任者兼警備隊長として頑張っています。

平岡佳子さん（京都府）
北海道・佐渡へ行ったこと思い出しています。また皆さんとの旅行に参加したいです。

白根貞夫さん（神奈川県）
会報をお送り頂き感謝申し上げます。妻を失い、細々と暮らしております。賄い方が下手なので苦労しています。齢、数え年で90に達しましたが、身辺セイリにとりかかっています。諸兄姉の御健勝を祈ります。

山本公之さん（東京都）
最近購入したのですが、希望者あれば伊能図大全をご覧になりたい方にお貸しします。ご連絡ください。また佐久間達夫様の測量日記どなたかお貸出し下さればと思っております。研究会図書室があれば宜しいのですが・・・

狼芳明さん（神奈川県）
趣味に仕事に元気にしております。総会で皆様にお会いすることを楽しみにしております。

田中精夫さん（鳥取県）
鳥取県における伊能忠敬測量について冊子にまとめたいと思っています。

馬場良平さん（佐賀県）
「伊能忠敬肥前国測量から２００年」の節目に「伊能測量２００年」をたたえ、佐賀県内各地で伊能忠敬測量隊の足跡をたどる歩く会を開催して来ましたが、この5月、19回すべてを終了しました。あらためて伊能忠敬測量隊の苦労と努力に頭の下がる思いです。今後も伊能忠敬の魅力を探究してゆきたいと思っています。

■ 新入会員　自己紹介

石川恵美さん（横浜市）
普段は、半導体製造装置、計測検査装置のコンサルティング、並びにシステム設計会社を経営しております。ナノメートル単位の微細化の計測業務に携わっておりますが、以前より伊能忠敬先生の「歩いて測量をする」というアナログな計測方法でありながら、想像を絶する精度を導き出した技術に非常に関心を持っておりました。
忠敬先生の足跡を辿り、自分の足で距離を計測できる技術を是非体得いたしたく、またその技術をどのように伝授し、前人未踏のプロジェクトを達成できたのか？そのマネジメントにも、とても興味があって入会いたしました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

寺尾承子さん（石川県）
寺尾承子と申します。伊能忠敬は、子供の頃から興味ある人物で、私の住んでいる土地に彼らが赴いたと思うと、今でも不思議な気持ちになります。これから、研究会で忠敬がいかに地図を作成したかを知り、勉強していきたいです。よろしくお願いします。

■退会

梅田和雄様

お世話になりました。

御退会の知らせをいただきました。伊能ウオークの際に、兵庫県の土地家屋調査士会会長を務めておられ、私が伊能ウオーク総隊長として現場におり ましたとき、御入会いただきましたが、以来13年、お世話になりありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

今後の御健勝をお祈りします。

名誉代表　渡辺一郎

■追悼

会員の荻原一輝さん（神戸市須磨区の整形外科病院の院長兼理事長）が亡くなられた旨、奥様からお知らせをいただきました。関西支部の会合に、奥 様とご一緒に参加され、熱心に忠敬談義をされたことを、つい先日のように、思い出しました。２度お話する機会がありましたが、事業にも成功された 方として、強く印象に残っております。

心から冥福をお祈りします。合掌。

名誉代表　渡辺一郎

■訃報

伊能研会員で香取支部副支部長をされていた窪谷悌二郎氏が本年二月十日逝去されました。享年七十七歳でした。墓地は潮来市浄国寺です。

悌二郎氏の家は、忠敬の時代に潮来村の庄屋を務める名門・窪谷庄兵衛家の分家です。本家庄兵衛家は、佐原の伊能七左衛門家から嫁娶りしている間柄にあり、七左衛門家は現在は、会員の伊能洋氏が跡を継いでおられます。

ご冥福をお祈り致します。

（伊能楯雄）

河崎倫代さんグループの伊能史跡調査は、没後二百年記念事業の一部なのですが、これまで、このような背景、予算、事業主体まで含めた調査報告は無く、後世に伝えるべき資料となるでしょう。まとめて単行本で刊行されるといいですね。

彼は何を知りたかったのか―

伊能忠敬の日本図

上演日時

２０１４年６月４日(水)～９月28日(日)

水・木・金・土・日曜、祝・休日

12時／14時／16時

所要時間　約40分

上演会場

東京国立博物館東洋館地下１階TNM&TOPPAN ミュージアムセンター

料金　高校生以上　５００円

中・小学生　３００円（夏休み期間無料）（別に博物館観覧料一般６２０円、ＶＲ*（バーチャル・リアリティ）とのセット券とすればＶＲ一回と観覧料で千円）

当日予約制　入館チケット購入時またはミュージアムシアター前で予約

映像は東京国立博物館監修で、TOPPANが製作したＶＲ作品です。

東京国立博物館所蔵の「大日本沿海輿地全図（中図）」の分割撮影による超高精細画像を中心に、伊能忠敬の活動が紹介されます。まだ実際の上映は見ていませんが、微細な針穴や、細かく書かれた地名や地図の細部にせまるとともに、伊能忠敬が日本地図をどのように作ったのかを、バーチャル空間のなかで実際に確かめながら学ぶ構成だということです。

問合せ先　０３－５７７７－８６００

http://www.toppan-vr.jp/mt/work/archive/index2.shtml

*バーチャル・リアリティとは？

コンピュータで生成された三次元コンピュータ・グラフィックスの映像の中を自由に移動しながらその三次元空間に居るかのような感覚を体験することができる技術（凸版印刷HPによる）。

東京国立博物館で上演中!!

VR（バーチャル・リアリティ）映像による

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ
論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。
＊刷り上がり一頁に入る文字数は約 2000 字（704 字×三段または 480 字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち
・**本文（テキスト）**　原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。
・**写真**　一般的な JPEG 形式または TIFF またはフォトショップの PSD 形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで 350ppi 程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。
＊印刷サイズが 100mm×75mm で 350ppi のカラー写真の場合、1MB 前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによって 5M モード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。わからない場合はＬ判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。
・**図**　写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG フォーマット）にしてください。カラー数の少ない図は GIF 形式のフォーマットでもかまいません。

③原稿の送り方
左記まで電子メール添付か、ＣＤなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

送り先
・**電子メール添付の場合**　inohken@icloud.com
・**郵送の場合**　〒153-0042　東京都目黒区青葉台４－９－６日本地図センター２階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項
・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておいてください。
・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号（第74号）は2014年10月発行　原稿〆切は9月末日の予定です。
皆様からの投稿をお待ちしています！

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。
①会報の発行　研究成果・会員活動情報など　原則として年三回発行
②例会・見学会の開催
③忠敬関連イベントの主催または共催
④その他付帯する事業

三、入会方法等　入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地
〒１５３-００４２
東京都目黒区青葉台４－９－６
日本地図センター２Ｆ
伊能忠敬研究会
電話・ＦＡＸ　０３-３４６６-９７５２
（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）
事務局メール　inohken@icloud.com
郵便振替口座　〇〇一五〇-六-〇七二八六一〇

伊能忠敬研究会関係ホームページ
〇「ＩｎｏＰｅｄｉａ（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典
http://www.inopedia.jp/
〇「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料
http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/
〇「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料
http://www.tt.rim.or.jp/~koko

編集後記

◇発行が年４回から３回に変わって初めての会報です。回数が減った分、紙数を増やすつもりでおりましたが、従来とほとんど変わりませんでした。会報は、会員皆さんの発表の場でもあります。伊能忠敬に関することならどのようなことでも構いません。全国を歩いた伊能忠敬が残した足跡は全国に居られる皆さんの傍にも残っているのではないでしょうか。伊能忠敬没後二百年を記念して、今回も河崎さんが伊能忠敬に関する記念碑を紹介してくれましたが、どなたでも構いませんので、何か発見したら報告をお願いします。（Ｔ・Ｈ）

「伊能忠敬研究」第 73 号© 2014 年 6 月 30 日発行　編集　髙安克己　発行　鈴木純子
〒153-0042 東京都目黒区青葉台 4-9-6　日本地図センター２Ｆ　伊能忠敬研究会　TEL&FAX 03-3465-9752